ILCAA

アジア・アフリカ言語文化研究所

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

東京外国語大学

要覧2008

A Guide to Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

目次

概　要

■所長あいさつ ……01
■AA研の研究活動 ……02
■研究組織構成 ……03
■研究および運営に関する評価体制 ……04

共同研究

■共同研究プロジェクト……06
■フィールドサイエンス研究企画センター(FSC) … 19
■中東イスラーム研究教育プロジェクト(MEIS) … 20
■中東・イスラーム研究セミナー
中東・イスラーム教育セミナー……20
■海外研究拠点 ……21
■東南アジアのイスラーム
――トランスナショナルな連関と
地域固有性の動態(ISEA)……22
■海外学術調査総括班(OSC) ……22
■言語ダイナミクス科学
研究プロジェクト(LingDy) ……23
■シンポジウム/ワークショップ ……23

研究資源

■情報資源利用研究センター(IRC)……26
■アジア書字コーパス拠点(GICAS)……27
■音声学実験室 ……28
■文献資料コレクション ……28

研究者養成・成果公開

■言語研修 ……30
■コーパスに基づく
言語学教育研究拠点(CbLLE) ……31
■Fieldling:記述言語研究コミュニティー ……31
■出版物 ……32
■企画展/WEB ……34

■役職・所内委員 ……35
■研究スタッフ ……35
■関連資料 ……45
■予算 ……54
■沿革 ……56

所長あいさつ

アジア・アフリカ言語文化研究所所長

大塚和夫

グローバリズム論でしばしば見落とされがちなアジア・アフリカに住む人々の生活の実態を研究すること

アジア・アフリカ言語文化研究所（略称：AA研）は、アジア・アフリカの言語・文化に関する総合的研究を目指して1964年に開設されました。高度成長を迎え、東京オリンピックが開催された年であり、新興の独立国を抱えるアジア・アフリカに対する知的な関心が高まってきた時期でもあります。以来、本研究所は、所外の研究者にも開かれた「全国共同利用研究所」として、関連する研究者コミュニティとの密接な提携を維持しながら、日本におけるアジア・アフリカ研究を第一線で主導してきました。国内外の研究者を集めた共同研究・シンポジウム、海外調査の組織化、研究資料の蓄積と公開、言語研修など若手研究者の養成、辞典・語彙集の編纂などが主たる活動です。近年では、「中東イスラーム研究教育」や「言語ダイナミクス科学研究」などの大型研究プロジェクトも推進されております。

昨今、「グローバル化」によって世界の人々の生活様式が均質化されると喧伝されています。人間、物資、情報などの移動・流通・伝達が加速かつ効率化され、とくに都市部では類似したライフ・スタイルがみられるようになったことは確かです。しかしそれは、世界が単一の文化、ましてや唯一の言語で覆われることを意味してはいません。むしろグローバル化の時代であるからこそ「文明の衝突」が論じられ、危機言語問題などが顕在化してきたといえましょう。地球に暮らす66億ほどの人々の多様な言語・文化のあり方、とりわけグローバリズム論で見落されがちなアジア・アフリカに住む人々の生活の実態を研究することの重要性と必要性は、むしろいっそう増しているのです。

本研究所は国立大学法人東京外国語大学の附置研究所ですが、全国共同利用研究所として、組織の枠を越えて国内外の研究者と広く連携した研究活動を展開してきました。国立大学法人化以降、わが国における高等学術体制の変化には著しいものがあり、一部では研究環境の悪化も叫ばれています。そして今年度は、第2期の中期計画の策定作業を始めます。国内のみならず国際的な共同利用・共同研究の拠点として、今後の研究・運営の構想を練りあげなければなりません。社会からのさまざまな要求に対応しながら、本研究所所員は学術研究の本来の姿である開かれた知の拠点を構築すべく、いっそうの努力を続ける所存です。皆様のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Tokyo University of Foreign Studies

AA研の研究活動

本研究所の当初の設置目的は、(1)アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究、(2)アジア・アフリカ諸言語の辞典編纂、(3)アジア・アフリカ諸言語の教育訓練、の3つでした。

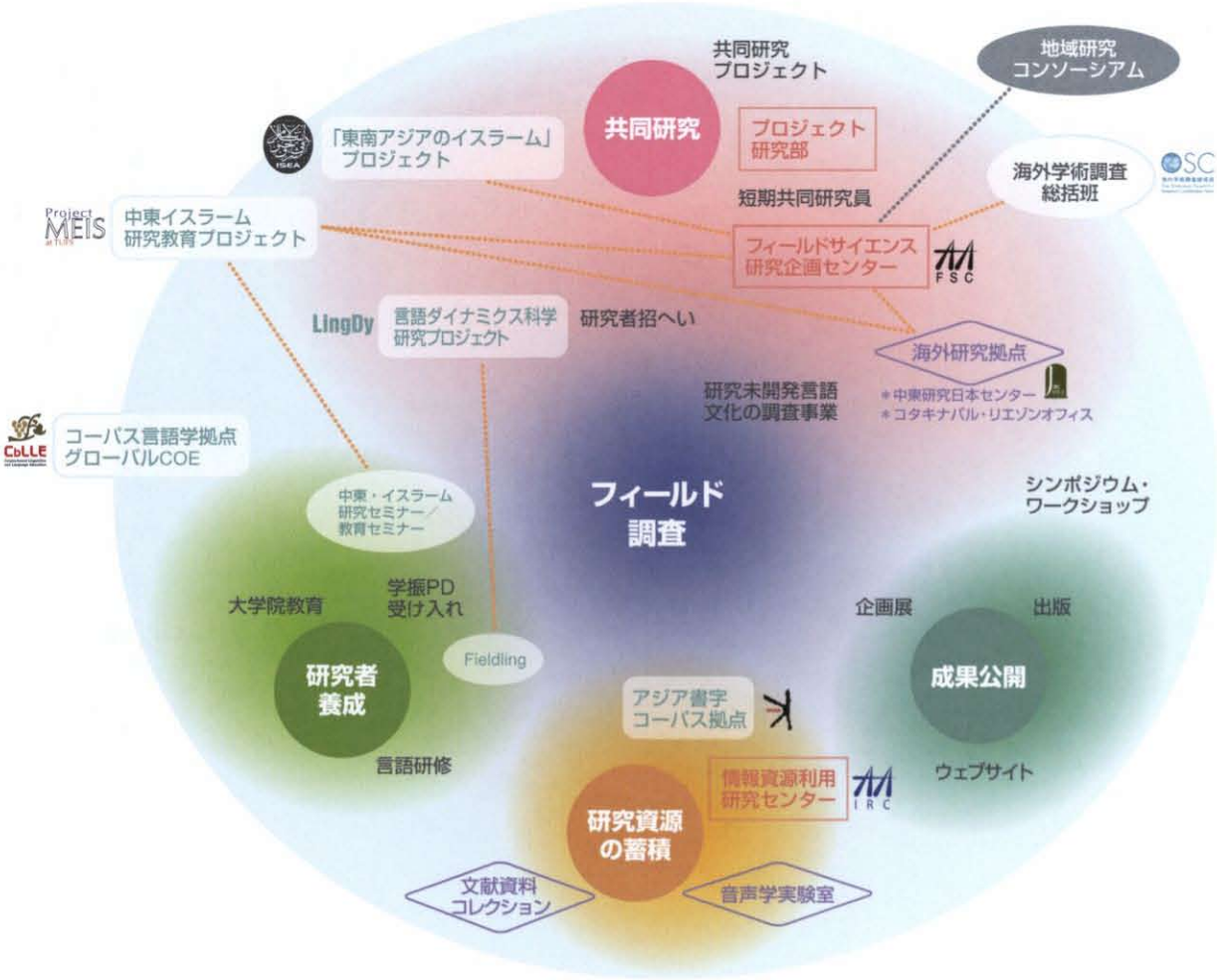
アジア・アフリカ地域の政治・経済・社会の急激な変化や、既存の研究分野を乗り越えた新しい学問・理論構築の要請、情報処理技術の革新などを承け、本研究所は当初の設置目的を現在の状況に即して見直し発展させた次のような長期的な基本目標を設定しました。

■臨地研究(フィールドサイエンス)を核とした国際的研究拠点として国際的水準の研究を先導するにふさわしい研究領域を設定し、国内外の共同研究プロジェクトを推進する。

■アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資料・情報を研究資源として利用可能な形に編纂し、それを国際的に共有するための研究資源拠点としての活動を進める。

■国内外の後継研究者の養成に努めるため、研究所の創設以来の歴史を持つ言語研修・研究技術研修・出版・広報活動の、いっそうの充実を図る。

AA研で行われている様々な研究活動が、上記の基本目標のどれにかかわるものとして位置づけられているかを示したのが、下の図です。



研究組織構成

運営諮問委員会

共同利用委員会

編集委員会

所　長

副所長

教授会

プロジェクト研究部

情報資源戦略研究ユニット	・言語文化情報に関わる新たな情報処理システムの構築 ・言語文化情報の提供、共同利用・公開のための手法の開発（アジア書字コーパス拠点（GICAS）担当ユニット）	町田・バースカラーオ 豊島・荒川・伊藤 バーティア*
コーパス研究ユニット	・アジア・アフリカ言語文化情報の分析・処理システムの構築およびそれに基づく言語文化の理論化	中谷・芝野・宮崎 峰岸・陶安・李*
文化動態研究ユニット	・フィールドワークに基づいた人間文化の現実態の実証的研究 ・人類史的視野の中での文化の理論的探究	深澤・大塚・高知尾 河合・西井
政治文化研究ユニット	・通時的視点からみた国家と地域における政治をその背景をなす文化の分析を通じて解明	永原・ダニエルス 中見・太田・近藤 尹*
言語動態研究ユニット	・フィールドワークに基づく実証的研究を基盤とした言語記述の方法論及び言語の多様性に関する根幹的な研究	中山・稗田・新谷 呉人・星・塩原 今枝*

情報資源利用研究センター（IRC）

・アジア・アフリカ言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開 ・情報資源を活用した共同研究手法の開発・国際学術交流の推進	栗原・高島・三尾 小田・澤田・渡辺 ディフロス*

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

・フィールドサイエンスに関わる研究者ネットワークとノリッジベースの構築 ・フィールドサイエンス技法の開発と研修の遂行 ・現代のアジア・アフリカの諸問題に複眼的な視座を提供するために、地域生成過程のダイナミズムを研究	黒木・真島・椎野 飯塚・高松・床呂

■人員構成

区分	教授	准教授	助教	外国人研究員	非常勤研究員	共同研究員	フェロー	ジュニアフェロー	計
現員	19	17	2	5	7	424	4	2	480

・共同研究員は延数　・フェローは日本学術振興会PDを含む（2008年7月1日現在）

研究および運営に関する評価体制

(2008年5月1日現在)

所長の諮問に応じ、本研究所の運営の基本的・長期的方針など重要事項を審議する委員会です。外部の委員によって構成されます。

2007年4月～2009年3月の運営諮問委員は次のとおりです。

家田　修（北海道大学スラブ研究センター教授）
上野　善道（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
倉沢　愛子（慶応義塾大学経済学部教授）
小泉　潤二（大阪大学理事・副学長/附属図書館長）
竹中　英俊（東京大学出版会編集局長）
立本　成文（総合地球環境学研究所長）
田中　二郎（京都大学名誉教授）
長野　泰彦（国立民族学博物館教授）
原　ひろ子（城西国際大学教授）
水島　司（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
渡邉　興亞（総合研究大学院大学監事）

本研究所の共同利用にかかわる事項を審議する委員会です。共同利用機能の運用を、研究者コミュニティからみて透明なしかたで行うために設けられたものです。親委員会と、言語研修および海外学術総括班に関する事柄を扱う二つの専門委員会から成っています。

2008年4月～2009年3月の所外の共同利用委員は次のとおりです。

□共同利用委員会（親委員会）

岸本　美緒（お茶の水女子大学教授）
北川　勝彦（関西大学経済学部教授）
栗田　博之（東京外国語大学外国語学部教授）
倉沢　愛子（慶応義塾大学経済学部教授）
栗本　英世（大阪大学グローバルコラボレーションセンター長）
庄垣内　正弘（京都産業大学文化学部教授）
水島　司（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
林　徹（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

□研修専門委員会

岸田　文隆（大阪大学大学院言語文化研究科教授）
高橋　明（大阪大学世界言語研究センター長）
藪　司郎（大阪大学大学院言語文化研究科教授）

□海外学術総括班専門委員会

伊藤　元己（東京大学大学院総合文化研究科教授）
木村　秀雄（東京大学大学院総合文化研究科教授）
佐藤　洋一郎（総合地球環境学研究所教授）
徳留　信寛（名古屋市立大学医学部教授）
河野　泰之（京都大学東南アジア研究所教授）
梅崎　昌裕（東京大学大学院医学系研究科准教授）
安成　哲三（名古屋大学地球水循環研究センター教授）
本山　秀明（国立極地研究所教授）

(1)全所評価

3年ないし4年に1度の頻度で、所外の研究者数名による所全体の研究活動、共同利用に関する評価を受けます。評価結果は公表されます。

(2)教員研究活動評価

教授昇進後7年を経た時点で、個々の教員は研究業績評価を受けます。評価結果は公表されます。

ベトナム中部ダナン、チャム彫刻博物館庭、彫刻や破片。
2001年11月　撮影者：澤田英夫

共同研究

■AA研の研究スタッフは、アジア・アフリカ地域の人々の営みを支える言語と、人々が生み出す多彩な文化を研究対象とする人文科学諸分野の研究者です。それぞれの分野でフィールド調査に根ざした研究を行いつつ、研究ユニット／センターのいずれかに所属して、所内での共同研究を行います。研究スタッフはまた、短期共同研究員の受け入れや、共同研究プロジェクトを組織することにより、所外の研究者との共同研究を展開します。共同研究プロジェクト ▶p.6

■共同研究の場は国内にとどまりません。国際的な学術交流を推進するため、AA研は次のような活動を行っています。

●シンポジウム／ワークショップの開催
先端的な研究を行っている国内外の研究者を発表者やコメンテーターとして招き、シンポジウムやワークショップを開催しています。▶p.24

●海外研究者の招へい
海外からアジア・アフリカの研究者を外国人客員として招へいしています。また、日本学術振興会や国際交流基金の招聘計画などで来日する海外の研究者、ならびに国内の研究者をフェローとして積極的に受け入れています。▶p.47

●国際学術協定の締結
海外の研究機関と協定を結び、研究資料・情報の交換、研究者の相互交流、共同研究調査などの国際的な学術交流を推進しています。▶p.46

●海外研究拠点の設置
レバノン共和国のベイルートに中東研究日本センター(JaCMES)を、マレーシアのコタキナバルにリエゾンオフィスを、それぞれ設置し、現地における共同研究の拠点とします。▶p.21

■研究の基礎をなすフィールド調査を「フィールドサイエンス」という固有の学問分野にまで昇華させる試みとしての研究手法の開発が、フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)の活動目的の一つとして行われています。▶p.19

■また、研究の蓄積のないアジア・アフリカの言語文化に関する資料を収集し、それらの研究を促進するため、研究者をアジア・アフリカ諸国およびそれらの旧宗主国に計画的に派遣しています。▶p.48

■研究所のスタッフが代表者となり、外部の競争的資金を受けて活動している大型の研究・教育プロジェクトとして、次のようなものがあります。(その他競争的研究経費による研究 ▶p.51)

- ●中東イスラーム研究教育プロジェクト(MEIS) ▶p.20
- ●東南アジアのイスラーム－トランスナショナルな連関と地域固有性の動態(ISEA) ▶p.22
- ●急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携構築(言語ダイナミクス科学研究プロジェクト)(LingDy) ▶p.23
- ●コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE) ▶p.31

共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が所外の研究者とともに推進する共同研究プロジェクトは、中核をなす研究活動のひとつと言えます。

年に1度、外部の共同利用委員を含む審査員を交えた共同研究プロジェクト発表会が開かれ、進行しているプロジェクトの研究実績や成果公開のしかた、新規プロジェクト計画の研究上の意義や実行可能性についての審査が行われます。

	プロジェクト名	年度	主査／所外代表	人数			主に関連する研究ユニット／センター	
				所内	所外	合計		
重点	言語の構造的多様性と言語理論 ー「語」の内部構造と統語機能を中心に	'05-'09(5y)	中山　俊秀	7	13	20	言語動態	p.7
一般	遼・金・西夏に関する総合的研究—言語・歴史・宗教—	'07-'09(3y)	荒川　慎太郎	2	18	20	情報資源戦略	p.8
	宣教に伴う言語学	'06-'08(3y)	豊島　正之	1	3	4	情報資源戦略	p.8
	朝鮮語史研究	'05-'08(4y)	伊藤　智ゆき	2	10	12	情報資源戦略	p.13
	言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されるバンツー諸語と隣接言語の記述研究	'07-'09(3y)	稗田　乃	2	18	20	言語動態	p.14
	総合人間学の構築	'07-'09(3y)	中谷　英明	7	32	39	コーパス	p.9
	社会空間論の再検討—時間的視座から	'07-'09(3y)	西井　涼子	5	16	21	文化動態	p12
	表象に関する総合的研究	'06-'08(3y)	高知尾　仁	4	8	12	文化動態	p.13
	人類社会の進化史的基盤研究(1)	'05-'08(4y)	河合　香吏	4	14	18	文化動態	p.13
	ムスリムの生活世界とその変容ーフィールドの視点から*	'05-'09(5y)	大塚　和夫	8	36	44	文化動態・FSC	p.16
	脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究	'07-'09(3y)	永原　陽子	2	30	32	政治文化	p.9
	ペルシア語文化圏の歴史と社会*	'07-'09(3y)	近藤　信彰	3	29	32	政治文化・FSC	p.11
	東アジアの社会変容と国際環境	'06-'10(5y)	中見　立夫	3	33	36	政治文化	p.15
	タイ文化圏における山地民の歴史的研究	'06-'10(5y)	クリスチャン・ダニエルス	3	12	15	政治文化	p.14
	チベット＝ビルマ系言語から見た文法現象の再構築1：格の体系とその周辺	'07-'08(2y)	澤田　英夫	3	11	14	IRC	p.10
	アジア・アフリカ地域における グローバル化の多元性に関する人類学的研究	'08-'10(3y)	三尾　裕子	2	7	9	IRC	p.10
	「シングル」と社会 —人類学的研究	'07-'09(3y)	椎野　若菜	2	18	20	FSC	p.11
	「もの」の人類学的研究—もの、身体、環境のダイナミクス	'07-'09(3y)	床呂　郁哉	4	20	24	FSC	p.12
	マルセル・モース研究ー社会・交換・組合	'06-'09(4y)	真島　一郎	2	6	8	FSC	p.15
	東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」*	'04-'08(5y)	黒木　英充	4	23	27	FSC	p.16
所外主査	多言語状況の比較研究	'08-'10(3y)	砂野　幸稔	2	30	32	言語動態	p.17
	語彙と文法	'07-'09(3y)	梶　茂樹	4	5	9	情報資源戦略	p.18
	漢字字体規範史の研究	'07-'09(2y)	石塚　晴通	2	7	9	情報資源戦略	p.17
	マレー世界における地方文化*	'05-'09(5y)	新井　和広	3	25	28	コーパス・FSC	p.18

*が付されたものは、「中東イスラーム研究教育プロジェクト」(p.20)とも関わりを持つプロジェクト。

共同研究プロジェクト

重点共同研究プロジェクト

言語の構造的多様性と言語理論
—「語」の内部構造と統語機能を中心に

「語」は人間言語に普遍の重要な構造単位・ドメインであることは異論の余地のないところである。しかしながら、同時に、「語」は通言語的に、内的構造の上でも、統語的性質の上でも幅広い多様性を見せる。それゆえ、「語」というドメインが文法体系の中で担う機能的役割は言語によって大きく異なる。

そこで、本プロジェクトでは、形式的単位としての「語」について通言語的に適用しうる定義を確認し、そのうえで、人間言語における「語」の構造的多様性(内的構造の組み立て方・複雑さについての多様性)および機能的多様性(統語法との間の役割分担のあり方の多様性)を探ることを目的とする。

今年度は特に形態的複雑さ(統合度)の類型と統語構造の関係性に焦点を当て、形態法と統語法の交点にある「語」の性質を通言語的に捉えてゆく。

[主　　査]	中山　俊秀			
[所　　員]	澤田　英夫	荒川慎太郎	呉人　徳司	
	塩原　朝子	星　　泉	渡辺　己	
[共同研究員]	阿部　優子	江畑　冬生	蝦名　大助	
	風間伸次郎	加藤　昌彦	加藤　重広	
	児島　康宏	沈　　力	塚本　秀樹	
	永井　佳代	長崎　　郁	永山ゆかり	
	山越　康裕			

中国・新疆ウイグル自治区阿克陶県ウジュマ郷のコンサク・マザール(イスラーム聖者廟)
2005年8月　撮影者：菅原純

カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、クワドラ島にて、クワクワカワクゥ族の伝統的デザイン　2003年8月　撮影者：中山俊秀

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

遼・金・西夏に関する総合的研究 ー言語・歴史・宗教ー

10-12世紀、中国北部・西北部に成立した遼・金・西夏は、東洋史上でも特異な位置を占める。昨今は従来の漢文史資料による研究のみならず、各国語独自の文字解読の進展、新出土資料の考古学的知見などにより、それらの研究は新たな局面を迎えつつある。

遼・金・西夏の研究は、それぞれの国家の独自性、各国語文字資料の特殊性などから、これまで個別に行なわれることが多かった。しかし近年では諸分野・諸地域にまたがった研究課題も増加してきた。従来の漢人世界中心の枠組みを見直すとともに、当時の北方地域を多角的・統合的に検討しなければならない。

本プロジェクトは、各国の言語・歴史・宗教という、広い領域にわたる研究者をメンバーとする。共同研究員が互いに情報を共有し、意見を交換して、より大きな視野でそれぞれの研究課題を捉えることを目的とする。また、「遼金西夏史研究会(http://www.h7.dion.ne.jp/~go-sez/index_LaoJinXixia.html)」とも連携して研究発表を行い、成果を一般に公開する。

[主　　査]	荒川慎太郎			
[所　　員]	中見　立夫			
[共同研究員]	井黒　　忍	臼杵　　勲	小野　裕子	
	佐藤　貴保	佐藤　友則	白石　典之	
	高井　康行	高橋　学而	武内　康則	
	武田　和哉	藤原　崇人	舩田　善之	
	松川　　節	松下　道信	向本　　健	
	毛利　英介	森部　　豊	渡辺　健哉	

中国内蒙古自治区エチナ旗　西夏〜元代の遺跡「カラホト」城内にて。半ば砂に埋もれた、北区画にある寺廟跡。2006年9月　撮影者：荒川慎太郎

宣教に伴う言語学

「宣教に伴う言語学」とは、所謂「大航海時代」のキリスト教布教に伴う言語研究活動を指し、英語では既にMissionary Linguisticsの語で定着している。

主たる資料となる文献は、16〜17世紀のスペイン・ポルトガルによる宣教活動に伴って生産された文法書、語彙集、辞書・字書、教義書、修徳書、その他の布教関連書籍、及び関連歴史文書(規約、年報、報告、書簡など)である。

プロジェクト研究の目的は、次の通り。

(1)従来の日本の「キリシタン文献研究」の成果を以て、国際的な「宣教に伴う言語学」の共同研究活動の水準の向上に寄与する。

(2)対訳辞書類に重点を置き、15〜17世紀のスペイン・ポルトガルに於ける辞書編纂史、同時代の日本に於ける辞書・字書編纂史を基礎とし、日本語以外の他の言語(例:コンカニ語)の対訳辞書も素材として、辞書編纂史・語彙研究史の論点を整理する。

(3)宣教活動に伴って生産された各国語の文法書類の文法カテゴリーの仕分け・対照等の対照研究、関連歴史文書類の書誌学的研究など、従来の日本の「キリシタン文献研究」の延長上にありながらも殆ど手つかずの状態にある領域に踏み出す。

[主　　査]	豊島　正之			
[共同研究員]	岸本　恵実	白井　　純	丸山　　徹	

ポルトガル、セルナンセーリェの聖母教会(Igreja Matriz, 12世紀)。2005年1月　撮影者：豊島正之

総合人間学の構築

飛躍する科学技術は、地球という自然と、人のこころという自然を大きく変えようとしている。紛争、貧困、自然破壊、地球温暖化など直面する諸問題は深刻である。さらにまた、グローバル金融経済によって欲望のままにあらゆるコモディティーが提供される社会は、人のこころを脆弱で荒んだものとする危険が大きい。

いったい人にとってどのような社会、どのような生き方がふさわしいのか。この古くから問われてきた問いを問うのが総合人間学である。総合人間学は、答えとしての一つの世界観を求めるのではない。むしろこの問いを問うために必要な、人の生にとって重要な情報をいかにして集めるか、また矛盾する情報の内容(「信仰」と価値の絶対性を否定する「開放知」との矛盾など)をいかにして折り合わせるか、などの方法的考察を行う。それは、脳神経科学、動物行動学から経済学、人類学、古典学にいたる現代の知の総合的対話の場を創出することによって可能であり、新しい知の構築の基盤固めとなるであろう。

[主　　査]	中谷　英明		
[所　　員]	峰岸　真琴	荒川慎太郎	芝野　耕司
	床呂　郁哉	真島　一郎	宮崎　恒二
[共同研究員]	池本　幸生	石堂　常世	市川　　裕
	井原　康夫	ヴィッツェル・ミヒャエル	
	内堀　基光	内山　勝利	大津　　透
	丘山　　新	小川　正廣	柿木　隆介
	笠井　清登	亀山　郁夫	河井　徳治
	黒田　　彰	後藤　敏文	新宮　一成
	杉下　守弘	杉本　良男	中島　隆博
	中島　秀人	中田　　力	長野　泰彦
	納富　信留	日高　敏隆	寳珠山　稔
	松井　　健	松尾　剛次	丸山　　徹
	水野　善文	水野　善文	笠井　清登

第4回総合人間学国際シンポジウム「開放知としての科学と宗教」（平成19年12月10日・11日　日本財団）のパネルディスカッション　左から中谷、内山、Changeux、日高、御子柴、中島　写真提供『日経サイエンス』

脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究

近年、世界の各地で、植民地支配の被害に対する謝罪や補償を求める動きが顕在化している。それらは、植民地支配を受けた地域の人々の歴史意識の変化を表わしており、政治的独立を経た後の、「脱植民地化」の新たな段階を示すものといえる。そうした動きはしばしば、狭義の植民地時代のみでなく、奴隷貿易・奴隷制の時代までをも視野に入れており、また、戦争犯罪、ジェノサイド、先住民問題、マイノリティ問題等、他の大規模人権犯罪の被害者の権利回復をめぐる動きとも連動している。

本研究では、そのような歴史意識の変化の背後にある旧植民地・宗主国間の関係をとらえ直すために「植民地責任」の概念を用い、アフリカをはじめ、アジア、中南米、太平洋地域など世界のさまざまな旧植民地地域の人々の歴史意識の変容を比較史的にとらえることで、脱植民地化の歴史過程の研究に新たな地平を切り拓くことを目指している。

[主　　査]	永原　陽子		
[所　　員]	栗原　浩英		
[共同研究員]	浅田　進史	阿部　小涼	網中　昭世
	栗屋　利江	飯島みどり	板垣　竜太
	今泉裕美子	大井　知範	大峰　真理
	小山田紀子	尾立　要子	後藤　春美
	小林　元裕	柴田　暖子	清水　正義
	鈴木　　茂	高林　敏之	旦　　祐介
	津田　みわ	中野　　聡	浜　　忠雄
	半澤　朝彦	平野千果子	
	舩田クラーセンさやか		前川　一郎
	真城　百華	溝辺　泰雄	吉澤　文寿
	吉田　　信	渡辺　　司	

ボツワナ共和国西部の村で。2007年3月　撮影者：永原陽子

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

アジア・アフリカ地域における グローバル化の多元性に関する人類学的研究

近年、ヒトやモノ、情報、そして文化の国境を越えた長距離の大規模な移動に関する関心が高まりつつある。こうしたトランスナショナルないしトランスローカルな移動や越境現象は、いわゆる「グローバル化」と名付けられ、これに関しては政治学・経済学などの社会科学における研究、あるいはメディアでの「グローバル化」をめぐっての関心や言説の興隆が指摘されている。しかしながら、地域研究や人類学の対象とする主にアジアやアフリカなどの現場においては、いわゆる「グローバル化」がいかなる形をとって進行しているのか、あるいは「グローバル化」と一括して語られることの多い現象の実際の多様で複雑な諸相はいかなるものであるのか、といった問題については、実証的ないし民族誌的な研究が必ずしも十分に行われてきたわけではない。また、従来の研究の多くは、「グローバル化」をめぐって欧米などを中心とし、そうした先進諸国のメトロポールと、いわゆる「第三世界」のあいだでの、ヒトやモノそして情報の移動を前提とするものが大半であった。いわば世界システム論が言う「中心／周辺」ないしは「南北問題」的な二項対立図式を前提として想定したものが主流であった。この現状に鑑み、本プロジェクトでは、総論的、観念的に語られることの多かった「グローバル化」について、文化人類学者を中心に歴史学や地域研究の研究者も加えて、アジアとアフリカにおける「グローバル化」をめぐる多様で複雑な諸相について具体的、実証的に解明していくことを目指すものである。また、「グローバル化」を最近の特異な現象として捉えるのではなく、より長い歴史の中で相対化して捉えることも目指す。更に、同時にこの研究を通じて従来の地域概念の再検討へ寄与することも目的とする。

[主　　査]	三尾　裕子		
[所　　員]	床呂　郁哉		
[共同研究員]	新井　和広	岩谷　彩子	奥島　美夏
	木村　　自	湖中　真哉	富沢　寿勇
	錦田　愛子		

チベット＝ビルマ系言語から見た文法現象の再構築1: 格の体系とその周辺

文法現象が「なま」のものでなく、分析することによって立ち現れて来るものならば、観察する視野の拡大と深化によって文法現象は「再構築」されるものであり、またされるべきものである。本プロジェクトは、そういう意味での文法現象の再構築を、この十数年で個別言語の記述の蓄積にめざましい進展をみたチベット＝ビルマ系諸言語の研究者が、各自の掘り起こしてきた言語事実と、それらを観察し記述する視点の広がりと深さを共有することによって行なおうとするものである。対象とする文法現象は、文とりわけ単文の構造の根幹にかかわる格の体系と、それに関連する諸現象である。

今年度は、前年度に各メンバーが行った格体系に関する報告を集約することで浮かび上がった共通性の高いトピック―格体系（能格型、対格型など）、他動詞P項の標示形式の使い分け基準、P項標示形式によって標示される意味役割の範囲、場所的格の種類とその使い分け、等々―について議論を深める予定である。

[主　　査]	澤田　英夫		
[所　　員]	星　　泉	荒川慎太郎	
[共同研究員]	池田　　巧	海老原志穂	岡野　賢二
	加藤　昌彦	桐生　和幸	白井　聡子
	鈴木　博之	高橋　慶治	西田　文信
	林　　範彦	本田伊早夫	

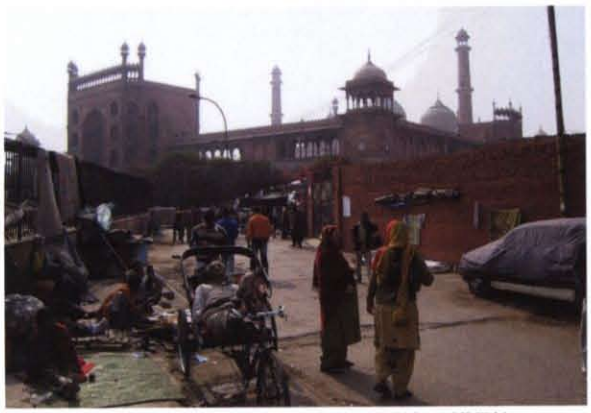
ベトナム中部ホイアン、華人の家屋に貼られた旧正月祝いの赤紙。
2007年2月　撮影者：澤田英夫

ペルシア語文化圏の歴史と社会

「ペルシア語文化圏」はおおよそ11世紀から19世紀のいずれかの時期にペルシア語を文学語、行政語として用い、ペルシア語文化の影響を強く受けたイラン、アフガニスタン、インド、マーワラアンナフル、アナトリアを中心とした地域を指す。この概念は日本では近藤(2000)を契機に用いられるようになり、2004-2006年度の北海道大学スラブ研究センターCOEにおいても共同研究が行われ、AA研でもシンポジウムが開催され、言語的に重層的な構造を持ちつつもペルシア語を軸に行われた文化交流の諸相がかなりの程度明らかとなった。しかし、この概念については検討すべき点が依然残っている。

本プロジェクトではこれを発展的に継承し、より幅広い分野の専門家を結集して研究会を開催し、「ペルシア語文化圏」概念についてその有効性と限界を、実証研究に基づいて検討する。また、先行する科研プロジェクトと連携して活動を行う。

[主　　査]	近藤　信彰		
[所　　員]	太田　信宏	高松　洋一	
[共同研究員]	赤坂　恒明	秋葉　　淳	阿部　克彦
	五十嵐大介	磯貝　健一	大河原知樹
	大稔　哲也	小野　　浩	川口　琢司
	川本　正知	後藤　敦子	小牧　昌平
	清水　和裕	菅原　　純	菅原　　睦
	中西　竜也	二宮　文子	羽田　亨一
	春田　晴郎	深見奈緒子	藤井　守男
	前田　弘毅	真下　裕之	間野　英二
	守川　知子	森本　一夫	矢島　洋一
	山口　昭彦	渡部　良子	



インド、デリーの金曜モスクを望む。2008年2月　撮影者　近藤信彰

「シングル」と社会—人類学的研究

本プロジェクトは、社会におけるシングルとしての個人に注目し、その生き方の実態を通文化的に比較研究するものである。シングルと社会のあり方、とくにシングルの生きる戦術を人類学的に明らかにするものである。こうした作業により、固定されがちなシングルに対する現代的な社会理念を文化人類学の立場から検討することをめざす。

現代社会における個人の生き方は多様化してきている。たとえば非婚者、未婚の母、寡婦／寡夫、出稼ぎ者とそのパートナー、老齢のシングル、といった社会的背景や条件をもつ人びとがいる。社会は、こうした単身者をどのように位置づけ、対応をしてきたのだろうか。ジェンダーや社会的地位による違いはあるだろうか。そうした社会的理念は、どのように変化しているのだろうか。

まず、これまでの個人についての哲学的研究や社会学的研究、社会史研究における研究成果を概観し、その歴史的変遷をとらえていく。そのうえで、宗教、社会組織、歴史的背景、地域文化的背景の異なる諸社会におけるシングルの多様な生き方の実態と各社会に通底する社会的理念とのはざまを、現代社会批判という意図を含み文化人類学的な視点を中心にさぐるものである。

[主　　査]	椎野　若菜		
[所　　員]	西井　涼子		
[共同研究員]	石井　美保	上杉　妙子	植村　清加
	宇田川妙子	岡田　浩樹	小田　　亮
	國弘　暁子	小馬　　徹	千田　有紀
	高橋絵里香	田所　聖志	田中　雅一
	棚橋　　訓	花渕　馨也	馬場　　淳
	細谷　幸子	森　　明子	八木　祐子

キオスクを営むルオの寡婦とその友人 撮影者：椎野若菜

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

社会空間論の再検討—時間的視座から

グローバリゼーションの進行のなかで、人類学は村落などの共同体を、境界づけられた小規模社会として閉じたものと仮定することがますます困難になっている。人類学の従来の対象そのものが変化するにつれて、人類学においても「境界づけられたフィールド」から「移行するロケーション」へとその対象をシフトさせる方向が見られる。これは、フィールドワーク実践をフィールドワークという方法論は残しつつ、その主要な学問的関心を、フィールドワークを行っている人類学者自身の行為や関係性に集中させていく傾向が強まっているということである。しかし、本プロジェクトの「社会空間」論は、このような近年の自己に収斂していく「ポストモダン人類学」とは袂を分かつ。「社会空間」とは、具体的な人々の生と社会関係が現実の行為によって築きあげられていく生きる現場そのものをさす。特に、グローバル化によって移動やコミュニケーション手段が飛躍的に拡大しても、心、身体、モノ、活動が日常的実践として組織されていく場所が存在することに注目する。その一方で「社会空間」論は、従来の構造やシステムとして人類学者や社会学者が生きた社会関係を還元した抽象化モデルによって把握しようとする試みとはまた異なる。あくまで日常から離れた超越的モデルに抗して、人々の日常的実践の場や過程を経験のなかから生の現場を捉えていく試みである。本プロジェクトは「社会空間」論に時間的視点を導入することで、その理論的射程をさらに深化/拡大させることを目指す。

[主　　査]	西井　涼子		
[所　　員]	河合　香吏	椎野　若菜	床呂　郁哉
	三尾　裕子		
[共同研究員]	石井　美保	今村　真介	岩谷　彩子
	春日　直樹	久保　明教	小池　郁子
	古谷　伸子	佐藤　知久	高木光太郎
	田中　雅一	田邊　繁治	土佐　桂子
	名和　克郎	檜垣　立哉	平井京之介
	箭内　匡		

「もの」の人類学的研究 —もの、身体、環境のダイナミクス

本プロジェクトは人間世界を取り巻く多様な「もの」をテーマとして人類学的視点から研究を行うものである。特に本プロジェクトではアジアやアフリカをはじめ各地で豊富な調査経験を持つ複数の人類学や関連分野の研究者の参加と協力によって、「もの」と人間社会との複雑で多様な関係について、環境や身体というキーワードを参照しながら学際的な共同研究として実施するものである。ここで「環境」に加えて「身体」というキーワードが出てくる理由は、「もの」の生産や加工(あるいは利用)などの現場において、身体化された暗黙の実践的知識や各種の身体技能などが大きな役割を果たすと指摘されることが少なくないからである。このため本プロジェクトでは通常のプロジェクト研究会の開催に併せて、国内各地における各種の「もの」の生産や利用の現場を見学するエクスカーションを同時に実施することで、「もの」に関わる身体的実践のあり方を実地に検証することも大きな特徴としている。

[主　　査]	床呂　郁哉		
[所　　員]	西井　涼子	河合　香吏	椎野　若菜
[共同研究員]	今堀　恵美	岩谷　彩子	印東　道子
	内堀　基光	織田　竜也	春日　直樹
	金子　守恵	川田　順造	窪田　幸子
	黒田　末寿	五島　朋子	湖中　真哉
	小松かおり	菅原　和孝	砂川　和範
	関本　照夫	田中　雅一	土佐　桂子
	山越　　言	山本　真鳥	

仕立て屋をして生計をたてる寡婦　撮影者：椎野若菜

表象に関する総合的研究

このプロジェクトは、まえのプロジェクト「旅と表象の比較研究」を継承しつつ、「人間にとって表象とは何か」という問いに対し、問題提起を行うことを目的とする。主に以下の3点について研究を行う。

(1)「表象としてのX」・・Xには、他者、土地、場所、宗教(神、死者等)、自然(風景、動植物等)、政治、などが考えられ、それらに関する具体的な研究。

(2)表象に関する理論的、精神史的研究。

(3)表象媒体に関する認知科学的研究。

[主　　査]	高知尾　仁		
[所　　員]	深澤　秀夫	小田　淳一	真島　一郎
[共同研究員]	浅井　雅志	荒木　正純	今村　真介
	彌永　信美	齋藤　　晃	田中　純男
	原　　毅彦	山内　志朗	

朝鮮語史研究

朝鮮語は朝鮮半島で話されている言語であり、日本語同様、その起源や系統関係が不明な言語である。また朝鮮語は15世紀半ばにハングルが創製されるまで固有の文字をもっていなかったため、朝鮮語史の研究はより困難なものになっている。

それに加え、従来の朝鮮語の研究はそれぞれの研究者が特定の時代の朝鮮語について研究することが主で、朝鮮語史を研究する者同士が相互に協力することによって朝鮮語史全体の流れを追求するということはなかった。

そこで本プロジェクトでは、古代～近代に至る朝鮮語の研究者が集まり、各時代の朝鮮語について、音韻・文法・書誌学等さまざまな側面からの分析を試みる。

2008年度は、年２回の研究会を企画する(１回に１～２名程度の研究発表を予定)。

[主　　査]	伊藤智ゆき		
[所　　員]	荒川慎太郎		
[共同研究員]	伊藤　英人	門脇　誠一	岸田　文隆
	ケンストウイッツ・マイケル・ジョン		
	趙　　義成	陳　　南澤	辻　　星児
	南　　潤珍	福井　　玲	藤本　幸夫

人類社会の進化史的基盤研究(1)

本研究プロジェクトは、人類社会を霊長類から現生人類に至る進化の軸上で比較考察し、人類学における社会理論の新たな展開をめざそうとするものである。それによって人類の「文化」が社会形成にいかに関与しているかを再考する。

社会理論のなかで第一に問題となる「集団」に焦点を当てる。「集団」の概念を霊長類進化史上におくことにより、この概念の自明性を崩し、個体レヴェルの自他認識を越え「他集団」なる抽象的な他者の生成に到る「集団」の成りたちをふくめ、「集団」の認識(perception)の生成と展開を進化史的な視点から検討する。これにより、他者認知やアイデンティティといった個体間関係、およびテリトリーの生成とその認知、規則の発生と定着の過程といった個体間関係を超えた社会事象に至る問題群に迫る。

社会事象にあって、「集団」は比較的顕在化(目に見えやすい)したものである。したがって「人類社会の進化史的基盤研究」というときに、広く霊長類学的知見を含めて、人類史的規模での比較の橋頭堡が築きやすい。長期的なプロジェクト研究としては、継続的に「制度」「所有」「認知」などを扱ってゆく予定であるが、その第一歩として、今回のプロジェクトを位置づけている。

共同研究員として、霊長類学の分野からは霊長類社会学および霊長類生態学の専門家、人類学の分野からは生態人類学、文化・社会人類学、人類生態学の専門家を加えている。

また副次的な効果として、近年、社会生物学、行動生態学への理論的特化という傾向を強めつつある霊長類学研究を、人類との関係に再び位置づけることにより、日本における霊長類学および生態人類学の創成契機であった人間存在の根源的かつ多元的理解という学的動機を回復しうることが期待される。

[主　　査]	河合　香吏			
[所　　員]	西井　涼子	椎野　若菜	床呂　郁哉	
[共同研究員]	足立　　薫	伊藤　詞子	内堀　基光	
	梅﨑　昌裕	大村　敬一	北村　光二	
	黒田　末寿	杉山　祐子	曽我　亨	
	田中　雅一	寺嶋　秀明	中川　尚史	
	早木　仁成	船曳　建夫		

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

中国西南部から大陸東南アジア北部に跨がるタイ文化圏の歴史においては、タイ系民族の盆地政権がその周辺の山岳地帯に居住する山地民を緩やかに「統治」した。19世紀以降、タイ文化圏は中国、ミャンマー(ビルマ)、タイ、ラオス、ヴェトナム及びインドの6ヵ国に組み込まれて、盆地政権は消滅した。盆地政権の領民はこの六つの近代領域国家に同化を強要されはしたものの、タイ文化圏はなお存続している。これまで研究者は、盆地政権中心にこの地域全体の歴史を再構築してきたが、山地民が盆地政権の存続を揺るがす存在であるにもかかわらず、山地民の歴史的役割を重要視してこなかった。本プロジェクトの目的は山地民の歴史的役割を明らかにして、その役割を総合的に概念化することによってタイ文化圏の歴史的形成を再解釈することである。

ミャンマー(ビルマ)シャン州、チェントゥン、センジュム村のわんぱく坊主。2006年2月　撮影者：唐立

このような再解釈によって、これまでタイ系民族側から叙述されたタイ文化圏の歴史がもっと公平に見られるようになると期待できる。これまで山地民が果たした歴史的役割を重視しなかった理由としては、以下の2点が挙げられる。第一に歴史家は、この6ヵ国における近代国家の建国に貢献した文化や民族が果たした役割を強調する視点から歴史を再構築してきたが、山地民は貢献度が少ないため等閑視されてきた。第二に、研究者は各民族集団の固有な文化と歴史の解明を目的に、個別的に研究してきたため、山地民が共通に経験してきた歴史という視点が見落とされてしまった。夥しい数の民族集団が居住する地方はそれぞれ異なるが、その歴史体験の共通性を明らかにする視点を採用する手法によって、タイ文化圏の歴史に対する統一的な理解を深化させることを、本プロジェクトは目指している。

山地民の歴史研究には史料的な制約があり、先行研究も乏しいため、プロジェクトの運営上以下のような措置をとる。山地民の多くは自己の文字を有しないので、盆地のタイ系民族や、中国とビルマ王朝の史料、及び西洋人など、外部の人間の手による資料に依存せざるを得ない。そのため歴史学者以外にも言語学や文化人類学などの専門家の参加によって学際的なアプローチを採用する。なお、本プロジェクトは、2005年度から開始された科研費基盤研究B「言語・文化調査に基づくパラウン史の解明」と連携し、現地調査を踏まえた事例研究の分析も行なう。

[主　　査]	クリスチャン・ダニエルス		
[所　　員]	新谷　忠彦	陶安あんど	
[共同研究員]	飯島　明子	池田　一人	尹　紹亭
	樫永真佐夫	片岡　　樹	加藤　高志
	清水　　享	武内　房司	長谷千代子
	村上　忠良	李　　力	山田　敦士

言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されるバンツー諸語と隣接言語の記述研究

大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツー語とその隣接諸言語を、既に現地調査を行った研究者を中心に、それらの言語の記述的研究の諸問題について明らかにするとともに、これまで各研究者が個別に得た成果を共同研究において総合し、討議することにより、この地域に特徴的な言語現象(音韻論的、形態論的、統語論的特徴)を探り出し、それらの言語現象をもたらした原因を探る。

この地域は、古代より人、物、文化の移動する重要な経路であった。様々な言語を話す人々がこの経路を通った。その結果、一つの言語的に特異な地域を形成した。言語接触と系統継承を解きほぐすことにより、この地域の特異な言語現象の実態を明らかにする。

[主　　査]	稗田　　乃		
[所　　員]	椎野　若菜		
[共同研究員]	安部　麻矢	阿部　優子	加賀谷良平
	河内　一博	ケーニヒ・クリスタ	
	梶　　茂樹	角谷　征昭	神谷　俊郎
	塩田　勝彦	品川　大輔	高村美也子
	中川　　裕	ハイネ・バーンド・リュディガー	
	フォッセン・ライナー		宮崎久美子
	湯川　恭敏	米田　信子	若狭　基道

東アジアの社会変容と国際環境

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地域における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

[主　　査]	中見　立夫			
[所　　員]	クリスチャン・ダニエルス			栗原　浩英
[共同研究員]	赤嶺　　守	石井　　明		石川　禎浩
	井上　　治	井村　哲郎		江夏　由樹
	岡　　洋樹	岡本　隆司		笠原十九司
	加藤　直人	川島　　真		貴志　俊彦
	岸本　美緒	楠木　賢道		佐々木　揚
	新免　　康	菅原　　純		
	ディ・コスモ・ニコラ			寺山　恭輔
	西村　成雄	萩原　　守		浜下　武志
	原　　暉之	平野　　聡		ブレンサイン
	細谷　良夫	松川　　節		松重　充浩
	毛里　和子	森川　哲雄		柳澤　　明
	吉澤誠一郎	吉田　豊子		

マルセル・モース研究ー社会・交換・組合

本プロジェクトでは、フランス社会学・民族学の基礎をきずいたマルセル・モースの業績を、書評・時事論説・講演録・未定稿なども含めた、そのほぼ全作品について横断的に吟味しながら、個人と国家のはざまに位置するものとして構想された「社会société」とは何であり、また何でなかったのかを、今日の視点から再検討する作業がめざされている。

とりわけ、学問形成期のサンスクリット研究から20世紀転換期の供犠論、呪術論をへて、やがて『贈与論』(1925年)で表明されることになる「交換」の民族学的モティーフが、同じ両大戦間期(＝第三インターナショナル／コミンテルン期)に発表された一連の協同組合論、ボリシェヴィズム論、暴力論、ナシオン論などと、また他方における個体論、身体論、人格論、技術論などと、「社会」学的次元でいかなる理論的連関により繋がれていたかが、共同研究の中心的論点となる。

『民族誌学の手引き』の著者は、法・道徳・貨幣・革命のかなたに、どのような凝集力をそなえた「社会」の姿を夢みていたのか。それはまた、今日のアジア・アフリカ諸国における「社会」の動態と、なんらかの接点をもちうる夢だったのか。

[主　　査]	真島　一郎			
[所　　員]	高島　　淳			
[共同研究員]	泉　　克典	小杉麻李亜		佐久間　寛
	関　　一敏	高村　学人		渡辺　公三

共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」

東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバリゼーションのプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動(Human Mobility)」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状況に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

なお、本プロジェクトは、AA研が主体となり2005年度から発足した特別教育研究経費「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の一環でもある。

[主　　査]	黒木　英充		
[所　　員]	飯塚　正人	小田　淳一	床呂　郁哉
[共同研究員]	臼杵　　陽	小副川　琢	粕谷　　元
	北澤　義之	栗田　禎子	佐藤　幸男
	佐原　徹哉	澤江　史子	末近　浩太
	土佐　弘之	長沢　栄治	中村　妙子
	錦田　愛子	間　　寧	堀井　　優
	前田　弘毅	松井　真子	黛　　秋津
	村田奈々子	森　晋太郎	家島　彦一
	屋山久美子	吉村　貴之	

19世紀後半のベイルート。地中海と冠雪したレバノン山脈。

ムスリムの生活世界とその変容 —フィールドの視点から

本プロジェクトは、世界総人口の2割ほどを占めるとされる世界各地のムスリム(イスラームの信者)の生活世界の実態を民族誌的アプローチから探るとともに、比較を通してそれらに見られる共通性・普遍性と地域・時代ごとの特殊性の双方を明らかにすることを主な目的とする。対象とする地域は、これまでのイスラーム研究において中心とみなされてきた中東のみならず、サハラ以南アフリカ、南アジア、中央アジア、東南アジア、東アジアを含み、さらに欧米などのムスリム・マイノリティ社会も視野に入れる。

主要な研究テーマとしては、衣食住をはじめとする、ムスリムの日常生活に見られる些細な社会的・文化的現象の検討を出発点とし、それから国家や国際レベルにおける政治・経済的大状況を考察するというボトムアップ的視点、すなわちフィールドの現実を重視する社会・文化人類学や地域研究的な方法を重視する。それと同時に、イスラーム学の専門家にも参加してもらい、ローカルな場における民族誌的事実とより普遍的なイスラームの法学・神学的解釈との異同も検討する。また、今日のムスリム社会が、一方ではイスラーム復興のさまざまな兆候を見せているとともに、他方では近代化・世俗化・グローバル化などの影響を強く受けていることを考慮し、その現代的変容のあり方にも注目しつつ研究を進める。

なお、本プロジェクトは、AA研が主体となり2005年度から発足した特別教育研究経費「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の一環でもある。

[主　　査]	大塚　和夫		
[所　　員]	飯塚　正人	黒木　英充	近藤　信彰
	椎野　若菜	床呂　郁哉	真島　一郎
	宮崎　恒二		
[共同研究員]	青柳かおる	赤堀　雅幸	新井　和広
	新井　一寛	石原美奈子	臼杵　　陽
	宇野　昌樹	大川真由子	大坪　玲子
	大稔　哲也	大野　　旭	奥野　克己
	菊地　滋夫	小杉　　泰	小牧　幸代
	斉藤　　剛	坂井　信三	澤井　充生
	清水　芳見	鷹木　恵子	高田　峰夫
	多和田裕司	東長　　靖	外川　昌彦
	中田　　考	長津　一史	中山　紀子
	縄田浩志子	島　　進	信田　敏宏
	花渕　馨也	堀内　正樹	三尾　　稔
	村上　　薫	山岸　智子	吉田世津子

共同研究プロジェクト

所外研究者を主査とする共同研究プロジェクト

多言語状況の比較研究

かつてグローバル化による世界の言語的文化的均質化が語られ、それに対抗する形で少数言語の保護、危機言語の救済が叫ばれた。しかし世界は考えられたように言語的均質化に向かうのではなく、むしろグローバル化は世界の多言語性を顕在化させつつある。国民国家の形成と国語の創生が消滅させるかに思われた言語問題は、再び諸国と諸国間において無視できない位置を占めつつあるのである。

従来、多言語状況の管理を目的とする言語政策をめぐる議論は、基本的に一国レベルで取り上げられてきたが、一方ではグローバル化による英語の影響力の拡大があり、他方ではEUの少数言語憲章や、世界銀行、ユネスコ等による「万人のための教育」キャンペーンの母語主義教育など、各国民国家のレベルを超えた介入が、各国家の言語状況に影響を及ぼすようになっている。

一国一言語という19世紀ヨーロッパ型国民国家の理念型がもはや通用しないことは明らかだが、それに代わる多言語主義にもとづく社会の形成については、さまざまな試みはすでに存在するが、いまだ試行錯誤の段階を超えていない。本研究では、ヨーロッパとアジア、アフリカの相互に大きく異なった歴史的社会的諸条件のもとにあるさまざまな国家、社会の言語問題とそこで行われている言語政策について、相互比較を通じて、従来の一国レベルの理解とは異なった総合的な展望を得ることを目指したい。

[主　　査]	砂野　幸稔（熊本県立大学）		
[所　　員]	稗田　乃	深澤　秀夫	
[共同研究員]	市之瀬　敦	大原　始子	梶　茂樹
	神谷　俊郎	亀井　伸孝	
	木村　護郎クリストフ		古閑　恭子
	小森　淳子	佐野　直子	塩田　勝彦
	品川　大輔	渋谷謙次郎	竹村　景子
	塚原　信行	柘植　洋一	寺尾　智史
	名和　克郎	原　聖	原　真由子
	藤井久美子	藤井　毅	フフバートル
	前田　達朗	宮崎久美子	森山　幹弘
	安田　敏朗	山下　仁	米田　信子
	李　守		

漢字字体規範史の研究

中国・日本での漢字の字体規範の歴史を描くために、後代の字体の規範となった主要文献を厳選し、その一字一字(単字)の画像を切り出して整理し、文献の編纂地域・時代・刊本写本の別・料紙・装幀などの附随情報と共に取得・対照可能な「漢字字体規範データベース」を拡張・編纂して、「字体規範の編年」を試みるプロジェクト。

実際の画像撮影・文字画像切り出し・関連データ入力の作業は、中国(明まで)・日本(中世まで)・朝鮮(参考のため数点)・ベトナム(同左)と、日本近世・近代とに分割して行なうが、本プロジェクトは、その両者を統合して「字体編年・字体規範の編年」に伴う諸問題を共有し・検討するために、共同研究プロジェクトとして行なうものである。

尚、本プロジェクトの前身「漢字字体規範データベース」HNGは、「東洋文字文化の継承と発展に寄与する優れた業績」であるとして一昨年(2006年)6月、第一回「白川静記念東洋文字文化賞」を受賞した。(http://www.joao-roiz.jp/HNG/)

[主　　査]	石塚　晴通（北海道大学名誉教授）		
[所　　員]	豊島　正之	伊藤　智ゆき	
[共同研究員]	池田　証寿	岡墻　裕剛	小池　和夫
	小宮山博史	高田　智和	府川　充男

共同研究プロジェクト

所外研究者を主査とする共同研究プロジェクト

語彙と文法

世界には多くの言語があり、その構造は多様である。そしてその構造に応じて、辞書・語彙集の形も変わってくる。例えば、英語やフランス語では、文法を知らなくても辞書はひける。単語の文法的変化が乏しく、出来合いの単語をそのまま辞書の見出しとしているからである。しかし、ドイツ語やロシア語では、出来合いの単語が見出しとはいえ、名詞なども変化するため、多少の文法的知識が必要となる。これがアラビア語になると、単語の基本は３子音であり、個々の単語はこれに様々な母音を組み合わせることによって形成されるため、単語を見出しとすることは通常しない。またアメリカインディアン諸語などでは、複統合、抱合その他の現象により単語を見出しにすることは不可能な言語が多い。その場合、形態素が辞書の見出しとなることが多い。

本プロジェクトは、世界の様々な言語の辞書・語彙集を作成している研究者が、文法構造など言語の特徴性を、その語彙構造を通して考察しようとするものである。

[主　　査]	梶　茂樹（京都大学）
[所　　員]	荒川慎太郎　星　泉　町田　和彦
	峰岸　真琴
[共同研究員]	中島　久　バーティヤ・テージ・クリシャン
	林　範彦　藪　司郎

マレー世界における地方文化

国家としてのインドネシア、マレーシアを包含する広義の「マレー世界」の多様な地方文化に関する人類学的な研究はこれまでも行われてきた。しかし、多くの地方に残る現地語文書に関しては、人類学、歴史学いずれの分野からも着目されていない。これらの文書の中には、各地方の文化の形成や変遷に関する興味深い資料が含まれており、あらたな資料の宝庫である。本計画は、これらの文書を中心に、地方文化の形成過程に関する研究を行うものである。2008(平成20)年度においては東南アジア各地で出版されたジャウィ定期刊行物や写本等、文書史料に関連する研究会を数回開催する。

[主　　査]	新井　和広（慶應義塾大学）
[所　　員]	塩原　朝子　床呂　郁哉　宮崎　恒二
[共同研究員]	青山　亨　オマール・ファルーク
	奥島　美夏　川島　緑　久志本裕子
	國谷　徹　桂沢　英雄　黒田　景子
	小林　寧子　塩谷　もも　篠崎　香織
	菅原　由美　坪井　祐司　東長　靖
	冨田　暁　中田　考　西　芳美
	ヌルハイディ・ハッサン　服部　美奈
	見市　建　水上　浩　光成　歩
	山口　裕子　山本　博之

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

■目的

フィールドサイエンス研究企画センター（略称FSC）は、2005（平成17）年度から所内措置により活動を開始、2006（平成18）年4月に正式発足しました。AA研の研究活動を特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に洗練して、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」という「現地学」を構築するとともに、調査関連データを体系的に蓄積し、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。

■活動の指針

現在、FSCの活動は次の7本の柱からなっています。特に(2)～(4)については、これらを包括する「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の事業本部をFSCに置いています。この事業は、現在のアジア・アフリカを俯瞰した際に、中東・イスラーム圏に焦点を当てた研究が極めて重要であるとの認識に立って、2005（平成17）～2009（平成21）年度の文部科学省特別教育研究経費をもって実施するものです。

(1)研究手法の開発

海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを目標とします。「フィールドサイエンス・コロキアム」という研究会を随時開催し、様々な専門分野の研究者とともに、調査手法やデータの意味づけ、さらに研究者と研究対象の関係性の問題などを集中的に議論し、情報・知識・経験の共有化を目指します。

(2)大型共同研究プロジェクトの実施

「ムスリムの生活世界とその変容」プロジェクトなど、中東・イスラーム圏を中心にグローバルな視野を持つ複数の共同研究プロジェクトを相互に関連させつつ推進します。

(3)研修事業

若手研究者育成のため、研究手法に関わる研修「中東・イスラーム研究セミナー」（7月・12月）、「中東・イスラーム教育セミナー」（9月）、「オスマン語文書学セミナー」（12月）を、さらに海外研究拠点も利用した若手研究者報告会（11月）を実施します。博士論文執筆予定レベルの若手研究者や大学院生の研修生を公募し、地域や専攻分野の枠を超えた学際交流の場を提供します。

(4)現地研究拠点の設置

上記(1)～(3)の活動を効果的に遂行するため、レバノンのベイルートに設置した研究拠点「中東研究日本センター」、マレーシアのコタキナバルに設置した「コタキナバル・リエゾンオフィス」を中心に、中東と東南アジアのイスラーム圏との学術交流を推進し、わが国におけるこの地域の研究の先端的拠点となることを目指します。

(5)ニーズ対応型地域研究の推進

2006（平成18）～2010（平成22）年度文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」の一つ「東南アジアのイスラーム」プロジェクトを推進する母体となっています。

(6)海外学術調査総括班

「海外学術調査総括班」は、1975（昭和50）年以来、AA研に事務局をおきつつ、科学研究費補助金・海外学術調査にかかわる研究者間、および研究者と文部省、日本学術振興会の間の情報交換、連絡調整などに当たってきました。例年、6月下旬に「海外学術調査総括班フォーラム」を開催して、ワークショップ、情報交換のための全体会議、地域別分科会を実施しています。FSCが「総括班」の実績を継承し、発展させています。

(7)地域研究コンソーシアムとの連携

「地域研究コンソーシアム」は、地域研究に関わる全国の研究組織のネットワーク形成をめざしています。AA研は拠点組織の一つとして2004（平成16）年のコンソーシアム設立に貢献しました。現在、AA研は幹事組織の一つで、FSCはその連携活動の窓口となっています。

FSC事務局はAA研5階に置かれています。
電話 042-330-5618, 5665
e-mail: fsc_office@aa.tufs.ac.jp
FSCのウェブサイト　http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/　もご覧ください。

海外学術調査総括班フォーラム・ワークショップ風景　2008年6月

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

中東イスラーム研究教育プロジェクト（略称MEIS）

Project MEIS at TUFS

中東イスラーム世界の政治・社会・文化に関する研究を積極的に推進するために、学部・大学院のスタッフとも協力しながら、2005（平成17）年度から５カ年計画でスタートした文部科学省特別教育研究経費による事業です。イスラーム世界に設けられる現地研究拠点での共同研究の展開を軸に、高度な研究プロジェクトの組織運営から、さまざまなレベルにおける研修・教育活動までをカバーしています。

AA研のスタッフが主として取り組んでいる事業は、以下のものです。

（１）現地研究拠点の設立と運営―レバノンのベイルート拠点を2006（平成18）年2月に設立、マレーシアのコタキナバル拠点を2008（平成20）年3月に開設しました。

（２）中東・イスラームに関する共同研究プロジェクトの実施（p.6の共同研究プロジェクト一覧を参照）

（３）全国の大学院生や博士課程修了者などを対象とした中東・イスラーム研究セミナーと中東・イスラーム教育セミナーの運営

（４）国内外の研究者を招いた研究会やシンポジウム、アラビア語・ペルシア語・オスマン語・ジャワ語の文献学・文書学セミナーの開催

（５）19世紀アフガニスタンの石版画など貴重資料のデジタル化と公開展示、図録刊行など研究成果の社会還元

このように多岐にわたる活動を通して、日本における中東・イスラーム研究の全国的な発展や国際的展開に貢献するとともに、若手研究者の育成も進めています。

また東京外国語大学外国語学部・大学院では、中東・イスラームに関する講義の充実（AA研スタッフも協力）に努めるとともに、中東の主要新聞の記事の日本語翻訳をWebページで公開し、広く社会に最新の情報を提供しています。

なお、本プロジェクトのより詳しい説明は、下記のウェブサイトをご覧ください。

http://www.tufs.ac.jp/common/prmeis/

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

中東・イスラーム研究セミナー、中東・イスラーム教育セミナー

2005（平成17）年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している研修事業です。中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めている大学院生や若手研究者を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションの能力を高めることを目的としています。

「教育セミナー」は、大学院生を対象に、AA研スタッフと招聘講師による講義、受講生のうち希望者による研究発表から構成されています。中東やイスラームについて専攻する院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームを専攻としない院生も受け入れ、基礎的な知識や研究手法の情報提供、受講者の間の討論を通した交流の場を作っています。

「研究セミナー」は、それよりも高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期（博士課程）および博士論文の準備をしている方々を対象にしています。講義は行わず、長時間の研究発表と徹底した討論の機会を提供します。博士論文構想のヒントを得たり、異なる研究分野・地域の研究者との意見交換から知識を拡充したりすることが期待されます。年1回の「教育セミナー」とは異なり、少人数で行われる「研究セミナー」は、年に2回開催されます。

なお本事業は、2006（平成18）年度から、東京外国語大学大学院、および同大学院と単位互換協定を結んでいる大学院に所属している院生には、単位履修申請科目となっています。

本事業のより詳しい説明や受講生のセミナーに対する感想・評価に関しては、下記のウェブサイトをご覧ください。

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/kyouiku_s.html（教育セミナー）

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/kenkyu_s.html（研究セミナー）

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

海外研究拠点

中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研は次の2つの研究拠点を海外に設置しました。

中東研究日本センター

(Japan Center for Middle Eastern Studies 略称JaCMES)

中東研究日本センターは、AA研がレバノンの首都ベイルートに設置した初の海外研究拠点です。2005(平成17)年12月15日にレバノン政府閣議決定による認可を受けて、2006(平成18)年2月1日に開所式を行いました。本センターは、AA研の全国共同利用機能を海外において展開すべく、次のような活動を行います。

(1)若手研究者報告会「日本の中東研究の最前線」

日本の博士課程大学院生や学位取得後の若手研究者が最新の研究報告を行い、レバノンを初めとした中東現地の研究者と直接交流する機会を提供します。

(2)若手研究者の調査派遣

日本の若手研究者を派遣して、現地調査に従事する機会を提供します。

(3)日本・中東関係講演会

日本と中東の関係、日本におけるイスラームの歴史などを専門とする研究者を派遣して講演していただき、交流の歴史と現状を紹介する機会を設けます。

(4)ベイルート学術情報の紹介

ベイルートを中心にレバノンの活発な学術・文化的活動の情報を収集し、ウェブページで公開して紹介しています。

所在地:Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura, Emir Bashir Street, Beirut Central District, LEBANON
Phone/Fax:+961-1-975851
URL:http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/jacmes/

中東研究日本センター会議室における研究会風景

コタキナバル・リエゾンオフィス

(Kota Kinabaru Liaison Office, ILCAA-TUFS)

コタキナバル・リエゾンオフィスは、マレーシア・サバ州政府により設立されたサバ開発研究所(The Institute for Development Studies)の全面的な協力により、AA研の東南アジアにおける政治・社会・文化に関する総合的学術研究拠点として、2008(平成20)年3月1日、同研究所内に設置しました。サバ州は、ブルネイ、インドネシア、フィリピンなどの東ASEAN成長地域、南シナ海及びインド洋の交差点にあたり、多様な文化の交流の場となっています。アジア海域世界の動態の解明にとって最適な地の利を生かし、マレーシア、日本及び関連諸国の研究者とともに多様な国際的共同研究プログラムを推進します。

所在地:Kota Kinabaru Liaison Office, ILCAA-TUFS
Institute for Development Studies(IDS), Suite 7CFO1, 7th Floor, Block C, Kompleks Daramunsing 88739 Kota Kinabalu, Sabah, Malaysia
Phone : +60-88-246116, 246167, 242871
Fax : +60-88-234707

海外拠点の利用に関する問い合わせ先:
東京外国語大学研究協力課全国共同利用係
Phone: 042-330-5600, 5603
Fax: 042-330-5610

サバ開発研究所前にて(2008年3月)

コタキナバル・リエゾンオフィス開設記念ワークショップ(2008年3月)

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

東南アジアのイスラーム
ートランスナショナルな連関と地域固有性の動態（略称ISEA）

本プロジェクトの目的は、東南アジアのイスラームに関して、現地の文脈におけるその固有性のみならず、トランスナショナルなイスラーム主義の諸潮流が現地に及ぼす影響といった、二つのレベルの関係性・動態を明らかにすることです。またその動態が、政治や経済、紛争や平和構築などの公共領域に及ぼす影響について、中東研究者を含む歴史学、人類学、政治学など多様な分野の研究者と実務家との協働によって解明することをめざします。本プロジェクトは文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」により、2006（平成18）年10月から4年半にわたり実施するものです。

本プロジェクトの詳細については下記ウェブサイトをご覧ください。

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/isea/

ムスリムの儀礼の一場面
マレーシア・サバ州西海岸のブルネイ系マレー人の村にて。
2006年　床呂郁哉撮影

フィールドサイエンス研究企画センター（FSC）

海外学術調査総括班（The Overseas Scientific Research Coordination Team, 略称OSC）

海外学術調査総括班は1975（昭和50）年以来、海外学術調査にたずさわる研究者・研究組織相互間および研究者側と日本学術振興会（以前は文部省）とのあいだの情報交換や連絡調整に当たってきました。その事務局をAA研フィールドサイエンス研究企画センターに置き、所員を研究代表者とし、様々な大学・研究機関の研究者を研究分担者として活動してきました。当総括班は、日本の海外学術調査に関する過去のデータ蓄積をふまえて、フィールド科学の超域的ネットワークの確立にむけた、総合的データベースの構築をめざしています。活動は次の3つを主なものとしています。

（1）海外学術調査の研究組織の代表者を集めた「海外学術調査総括班フォーラム」の開催

（2）国際情勢に即応した研究を可能にするための現地調査

（3）これまでの海外学術調査に関するデータのウェブページにおける限定公開とその利用の開発

本年度海外学術調査総括班は、2006–09（平成18–21）年度科学研究費補助金（基盤研究（A））の助成により活動しています。

詳細は下記ウェブサイトをご覧ください。

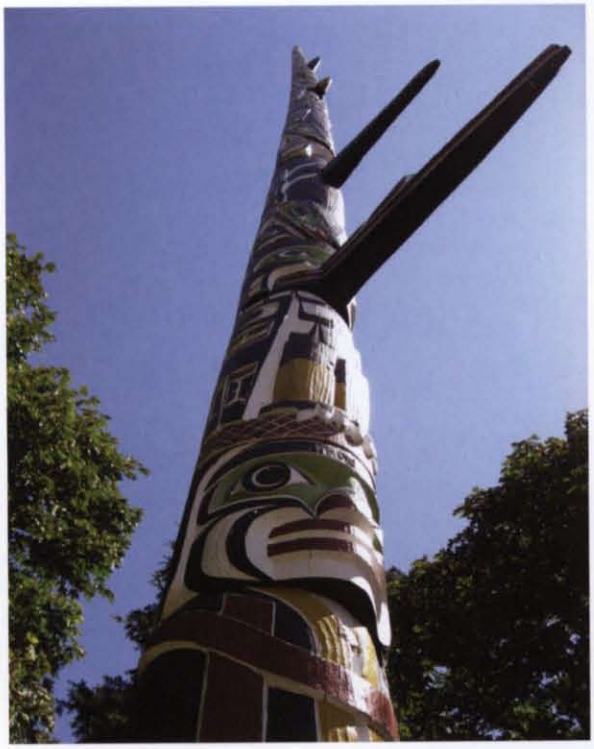
http://www.aa.tufs.ac.jp/~gisr/index.htm

急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築

言語ダイナミクス科学研究プロジェクト（略称LingDy）

世界に7,000弱あるとされる人間の言語は、人間の認知能力と社会活動が生み出す伝え合いの体系がいかに多様な形を取りうるかを見せてくれます。近年、特に研究未開発の少数言語からのデータが徐々に蓄積されてくるとともに、人間言語に関する一般理論の構築を目指す言語研究の中でも言語の構造的多様性の幅と深さが強く意識されるようになってきました。また、欧米主導の急激な経済グローバル化の中で伝統的言語の大量消滅が世界的に進む今日、言語・文化の多様性の保護・研究を継続的に保障する基盤を構築することが国際的な緊急課題となっています。

本プロジェクトは、こうした学術的、社会的要請に応えるため、文部科学省特別教育研究経費を受け2008（平成20）年度より5カ年計画でスタートし、研究未開発言語のドキュメンテーション研究（語彙、文法、テキスト資料、及び文化・社会的情報の収集を通した多面的な記録と研究）の活性化・体系化と、構造的多様性と歴史的変化のダイナミクスを踏まえた言語システムに関する総合的研究の構築を、継続的な国際連携体制の下で進めることを目的としています。プロジェクトを支える連携体制は、アジア・アフリカ言語文化研究所を国内とりまとめ機関とし、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ学学院とドイツのマックス・プランク進化人類学研究所を海外連携拠点として、組まれています。



原住民の失われつつある伝統文化・芸術を人々の意識に残すべく公園に立てられたトーテムポール群。文化を生み出す人間社会の活動を支える言語もまた，残すべき人類の遺産であると言える。（カナダ，ブリティッシュ・コロンビア州，ビクトリアのサンダーバードパークにて）撮影者：中山俊秀

このプロジェクトで取り組んでいく活動には以下のようなものが含まれます：

■言語多様性に関する先端的研究の推進

・研究未開発言語のドキュメンテーション研究の推進
・言語多様性研究のための基盤的データのデータベース構築
・ドキュメンテーション研究方法論の体系的トレーニングの提供
・共同研究研究会、シンポジウムなどを通じた構造的多様性と歴史的変化のダイナミクスを踏まえた言語システムに関する総合的研究の推進

■国際的共同研究インフラの構築と研究交流活性化

・ドキュメンテーション研究に関する情報共有と相互支援を目的とした研究コミュニティーの形成
・参加型オンライン交流環境の構築とそれによる持続的研究交流のサポート
・国際的共同研究を先導・組織できる若手言語研究者の育成

■研究資源共同利用体制の構築

・研究成果、言語資料処理・資源化のための方法論研究と技術的開発
・言語データ共有、共同利用を可能にするためのアーカイブネットワークの構築

■記述言語学に携わる若手研究者のネットワーク構築

・記述言語研究コミュニティー Fieldlingの主催（p.31参照）

シンポジウム／ワークショップ

シンポジウム・ワークショップは、共同研究の方法の1つとして位置づけることができますが、同時に、研究成果を公開する場としての側面を持っています。

とりわけ、国内外の先端的な研究を行う国外・国内の研究者を招へいして行う国際シンポジウム・ワークショップは、AA研が人文系の学問分野で先学的な役割を果たしていく上で、特にその重要性を増している活動であるといえます。

主なシンポジウム・ワークショップ（開催時期・会場）

■Documentary Linguistics Workshop 2008
（2007.2/14〜2/17 AA研）

■第4回総合人間学国際シンポジウム
「開放知としての科学と宗教」
（2007.12/10〜12/11 日本財団）

■東京4大学連合第2回文化講演会
「安全と安心の未来をさぐる」
〜学術研究の最前線をわかりやすく解説する〜
（2007.12/4 一橋記念講堂）

■国際ワークショップ
「ベトナムにおける中国系住民の歴史・
文化とアイデンティティーホイアンの事例から」
（2007.12/1〜12/2 東京外国語大学本郷サテライト）

■国際シンポジウム
「アフガニスタン近代史再考」
（2007.11/10 AA研）

■国立大学附置研究所・
センター長会議第三部会（人文・社会科学）シンポジウム
「さまざまなイスラーム：アジア・アフリカ研究の現場から」
（2007.11/1 東京外国語大学）

■国際シンポジウム
「パンサとウンマ：東南アジア・イスラーム地域における人間集団分類概念の比較研究」
（2007.5/13 AA研）

■アジア・アフリカ研究・教育コンソーシアム記念シンポジウム
「危機に瀕するアジア・アフリカの言語と文化」
（2007.3/7 AA研）

■国際シンポジウム
"Ethnic Division of Polity and Society in Post-Civil War and Under-Conflict Nations: Cyprus, Lebanon, Former Yugoslavia, Iraq and Israel/Palestine"
（2007.1/28 麹町・東京グリーンパレス）

■第3回総合人間学国際シンポジウム
「先端科学と人間らしさ」
（2007.1/13 AA研）

■『大モンゴル国』
創建800周年記念シンポジウム
「モンゴル世界：過去と現在のダイナミクス」
（2006.12/22〜23 AA研）

■資源人類学国際シンポジウム
（2006.12/9〜10 AA研）

■共同研究プロジェクト
「東地中海地域における人間移動と『人間の安全保障』」臨時研究会
「パレスチナ／イスラエルの地理情報学と地図」
（2006.12/8 AA研）

■研究報告会「日本における中東・多文化研究の最前線」
（2006.11/27 イスタンブル・ボアジチ大学）

■『OJA =アビジャン 2006』
ー環境・映像・「人間の安全保障」をめぐる緊急国際集会
（2006.11/23〜24 コートディヴォワール・ラフォンテーヌ映画館）

■東京4大学連合第1回文化講演会
「安全と安心の未来をさぐる
〜学術研究の最前線をわかりやすく解説する〜」
（2006.10/30 一橋記念講堂）

■国際ワークショップ「アムール川流域からみた露清関係」
（2006.9/8 日本大学文理学部図書館オーバルホール）

■緊急ワークショップ
「中東戦争の深淵ーイスラエルの対レバノン攻撃をめぐって」
（2006.7/21 明治大学リバティタワーリバティホール）

■連続国際ワークショップ「近代レバノンの歴史を考える」
（2006.7/8・14 AA研）

■中東イスラーム研究教育プロジェクト：
W. O. Beeman氏公開講演会
（2006.7/6 AA研）

研究資源

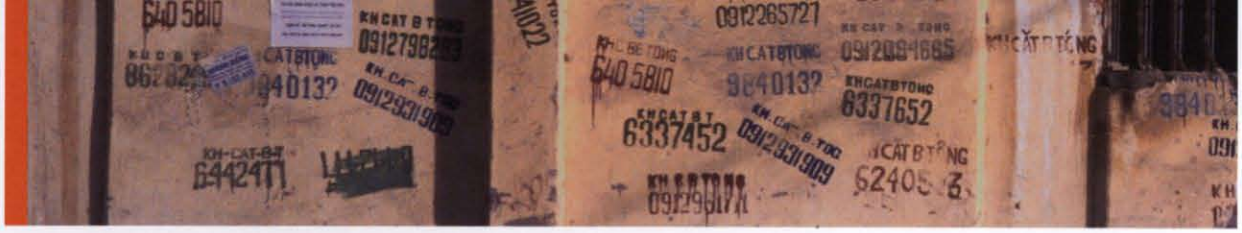
AA研は、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資料・情報を研究資源として利用可能な形に編纂し、それを国際的に共有するための研究資源拠点としての活動を推進しています。

■情報資源利用研究センター(IRC)は、言語のテキストや音声、写真・絵画・地図・ポスターなどの画像、フィールド調査記録といった言語・文化に関する情報資源を蓄積・加工して、データベース・アーカイブ・電子辞書・言語地図などの形で公開し共同利用に供しています。▶ p.26

■情報資源戦略研究ユニットが担当するアジア書字コーパス拠点(GICAS)は、アジア各地の文字資料を電子化してコーパスを構築し、それをもとに「文字情報学」という新たな学問領域を体系化することで文字情報処理に学問的基盤を与え、アジアの文字に関する文字情報学の国際リファレンス・センターとしての役割を果たしています。▶ p.27

■音声学実験室は言語音の録音・分析設備に加え、スタッフのフィールド調査を通じて収集された言語音など録音資料のライブラリを有しています。▶ p.28

■現地の図書・雑誌・文書・地図などの文献およびマイクロフィルム、アジア・アフリカ研究の分野における先覚者の個人文庫など、貴重な資料を収集した文献資料コレクションがあります。▶ p.28



情報資源利用研究センター(IRC)

1. 設置目的

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター(Information Resources Center / ILCAA 略称IRC-ILCAA)は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的として、1997(平成9)年度に設置されました。

2. 設置の背景と活動の指針

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをデジタル化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論的分析をおこなうとともに、歴史学的・民族学的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。これらのデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカ諸言語の辞典・文典編纂のための基礎資料を提供するとともに、全国の研究者コミュニティの共同利用に供されてきました。

情報資源利用研究センター(以下IRC)は、このような従来の研究所の活動を基礎に、それを継承すると同時に、下記の点で、理論・技術の整備・洗練を行うことをめざしています。

(1)アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開

本研究所内には，所員が中心となって収集した上記のような言語データのみならず、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料(パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等)が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、IRCでは公開に向けた整備を継続して行っています。

(2)国際的共同研究の展開

アジア・アフリカの言語文化に関するデータベースや電子辞書、映像資料などの構築・作成、公開と共有のプロセスを国際的な次元で展開し、それに対する研究支援を整備していきます。それを通じて国際的共同研究の効率化と内容の充実を図っていきます。

(3)コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体

通時的文字論を考慮した文字コード(符号化文字集合)論、多言語処理論、多表記系(スクリプト)の照合(collation)・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備が皆無といってよい分野を理論化することは急務となっています。また、多表記系(スクリプト)混在でのinput methods、整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系でのinput methodsとインタフェースにも、今後積極的に関与していきます。

3. 今年度の主な研究事業

第一には引き続き、IRC経費によるデータベース構築、アジア・アフリカの言語文化に関する一次資料の研究資源化のためのプロジェクトを企画し、実施していきます。具体的には「日本語マラヤーラム語電子辞書」(代表：髙島淳)、「北東ユーラシアの言語文化」(代表：呉人徳司)、「チベット研究総合プロジェクト」(代表：星泉)などのプロジェクトが予定されています。第二には、所内・学内の研究単位、具体的には言語動態研究ユニット、グローバルCOE「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」との連携研究活動を行います。そして第三には、IRCスタッフを中心としたプロジェクト「地名にみる歴史の痕跡」に着手します。

4. デジタル言語文化館

IRCでは，研究活動の成果を発信するために、インターネット上に「デジタル言語文化館」を開館しています。この「デジタル言語文化館」は、コンテンツのみならず、その加工・呈示技術やそれらの技術の背景となる理論自体もコンテンツとして含む点を特徴としており、従って、蒐集展示及び蒐集資料・技術の双方の利用を可能にしているところが、従来のデジタルライブラリ(電子図書館)発想を越える点であるということができます。

5. IRC改組に向けて

IRCは1997(平成9)年4月の設置以来、着実なデータの蓄積・加工・公開を継続し、言語地図や電子辞書などIRCの「顔」ともいうべき成果を造り上げてきました。今後はこれらの成果を踏まえて、中期計画に記載された「研究資源構築ならびにその共同利用に向けて国内外の研究者との連携体制を強化する」という方針に基づき、以下の方向性にそった研究活動内容が検討されています。

(1)研究資源構築と体系化：IRC設立以来今日までに蓄積されたノウハウを総括し、その応用、改良、普及を図ります。

(2)ウェブサイトの充実を図るとともに、研究資源発信体制を強化します。

(3)研究者コミュニティにおける情報化された研究資源の共有とそれに基づいた研究手法の探究を進めます。

(4)所内の研究ユニットと連携しながら共同研究を進めるとともに、センターを主体とした連携性・国際性のある研究テーマを外部資金の導入も視野に入れながら追究していきます。

アジア書字コーパス拠点(GICAS)

GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって2001(平成13)～2005(平成17)年度の5年間にわたり補助金を得て形成されてきた「COE研究拠点」の一つです。

GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

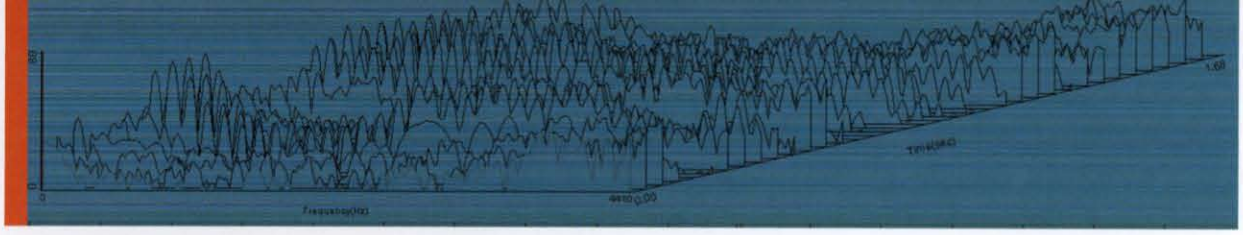
GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築してきました。各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体現であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

5年間(平成13年～17年度)の補助金助成が終了したGICASは、2006(平成18)年度より、名実ともにCOE拠点としてひとり立ちしました。研究面では、従来のプロジェクトを継承発展させるとともに、文字情報学の新しいパラダイムの展開に取り組んでいます。具体的には、科学研究費や委託研究費など新たに獲得した各種の競争的研究費による研究プロジェクトを核に研究を推進しています。

2006(平成18)年度よりGICASの本研究所内の組織的運営は、情報資源戦略研究ユニットが担当しています。

GICASは独自のインターネット・ドメインを取得済です。GICASのホームページはhttp://www.gicas.jp/で、そこにこれまでの研究成果などが公開されているので、是非ご覧ください。



音声学実験室

本研究所の音声学実験室は、言語音の基礎研究に関する分析や実験を行うために必要不可欠な設備を備えています。コンピュータスピーチラボ(CSL4500)は、多機能な発話信号分析機器です。音声などのアナログ信号を高品質でコンピュータに取り込み、スペクトログラム・フォルマント軌跡・LPC(線形予測符号化)周波数反応・FFT(高速フーリエ変換)パワースペクトル・LTA(長期平均)パワースペクトル・ケプストラム分析・ピッチ曲線分析・エネルギー曲線分析など、さまざまなタイプの分析を行うことができます。また、波形編集・チャンネル編集・時間編集・振幅編集などの基本的な編集機能や、記録・再生の機能も当然ながら有しています。さらに、リアルタイム・スペクトログラフ分析とリアルタイム・ピッチ分析を行うためのCSL専用ソフトウェアも利用可能です。この機器は、言語学的観点から見た発話音の様々な側面の分析を行うのに適切なものです。

音声学実験室に備えられた音声・言語ライブラリには、所員をはじめとする研究者がフィールド調査を通じて収集してきた言語音・民話・民族音楽など貴重な録音資料が保管されています。これらフィールド調査の成果である録音ディスク・テープの一部および世界諸言語の録音ディスク・テープは、借り出すことができます。実験室にある分析機器・録音機器・メディア変換用機器などのハードウェアとソフトウェアには使用説明書が備えられ、利用者の便を図っています。

音声学実験室内には、防音スタジオが用意されています。スタジオに備えつけられた最新型のソリッドステートデジタル録音機を使用して、話者の発話サンプルの高品位な録音を行い、実験室の機器を用いてそれを分析することができます。

文献資料コレクション

本研究所は、1964(昭和39)年の創設以来、全国共同利用機能をもつ研究所として、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究のための重要資料を収集してきました。現在、資料総数は、図書11万冊、雑誌約1,220タイトル、マイクロフィルム1万余リール、マイクロフィッシュ3千余に達し、ほかに古文書、地図、写真、またヴィデオやCD-ROMなどの形の資料も所蔵しています。本研究所のみがもつ貴重な資料も少なくありません。

たとえば、カンボジア語版南伝大蔵経は、カンボジアの戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所所蔵本をもとに複製版がつくられ、カンボジアの文化教育機関、寺院に寄贈されて、彼の地の文化復興に貢献しました。また、浅井恵倫旧蔵資料(台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート等)は、研究所ホームページで公開されています。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌」(第2版)、19世紀「カイロ石版画集」コレクション、19世紀末からのイランの主要新聞65種、19世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、満洲国駐タイ公使館文書、日本の植民地官僚で京城帝国大学総長も務めた篠田治策の文書など、貴重な資料が所蔵されています。三浦周行旧蔵品を含む朝鮮王朝古文書類コレクションや、清代公文書コレクションは、近年入手したものですが、現在も継続して収集を続けています。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫としては、山本謙吾(満洲語研究)、小林高四郎(モンゴル史研究)、前嶋信次(イスラーム研究)、王育徳(台湾語・文化研究)諸氏の蔵書があります。

蔵書のうち、一般図書、個人文庫類は附属図書館1階(書庫2層)のAA研コーナーに配架され、貴重書、辞書・辞典・目録等の参考図書、大型本、叢書、マイクロフィルム類、雑誌は研究所棟1階の文献資料室に設置されています。AA研所蔵資料の利用については、

http://www.tufs.ac.jp/common/library/etc/AAshiryoshitsu.html

をご参照ください。

書架を増設した文献資料室

研究者養成

アジア・アフリカ地域に生きる人々の営みへの理解をさらに深めていくことは、我々が絶えず取り組んで行くべき課題です。次代を担うこの分野の研究者を養成するために、AA研は次のような活動に取り組んでいます。

■アジア・アフリカ地域の研究を志す学習者のために、日本人の専門家と母語話者とが協力して、独自の教材を用いた短期集中的な言語研修を毎年行っています。▶p.30

■様々な大型研究・教育プロジェクトの内部で、研究者養成のプログラムを実施しています。

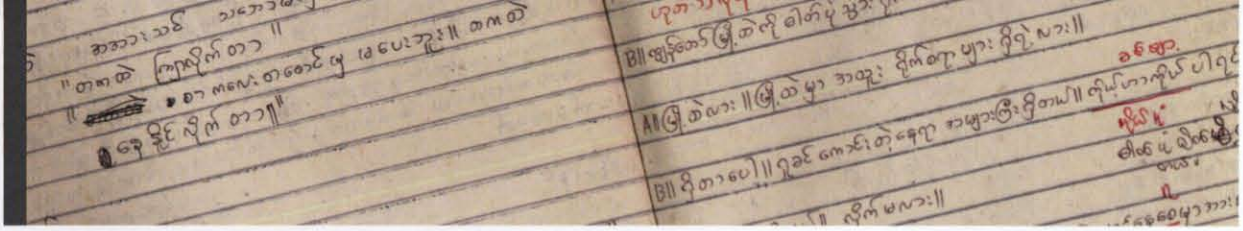
- グローバルCOE拠点形成プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」▶p.31
- Fieldling（言語ダイナミクス科学研究プロジェクトの活動の一部である、記述言語学の若手研究者のコミュニティー）▶p.31
- 中東・イスラーム研究セミナー、中東・イスラーム教育セミナー ▶p.20

■大学院教育への参加や、日本学術振興会特別研究員の受け入れを行っています。▶p.50

成果公開

アジア・アフリカ地域の人文科学研究の成果に対する一般社会からのニーズに応えるために、AA研は次のような成果公開の活動を行っています。

■定期刊行物・叢書・基礎語彙集・言語研修テキストなど、各種出版物の刊行。▶p.32
■研究成果の一端を、わかりやすく興味深い形で見せる企画展の開催。▶p.34
■ウェブサイトを通じた情報発信。▶p.34
■公開シンポジウム・講演会 ▶p.24



言語研修

本研究所では毎年、アジア・アフリカ諸言語の短期集中的な研修を実施しています。この言語研修は、次のような目的で行われるものです。

・アジア・アフリカ地域の研究を志す初学者に、基礎的な言語運用の訓練を行う。
・現地調査や文献研究を行うために必要な言語知識や言語調査の手法など、専門的な知識を教授する。
・学習環境が整っていない言語の教材を作成し研修を通じて改良を加えることで、基礎的な学習環境の整備に寄与する。

言語研修は、日本の専門研究者と母語話者とがいっしょに教授にあたる生きた言語教育である点を特徴としています。1974(昭和49)年度以降に研修を実施した言語は、下図及びp. 49の通りです。

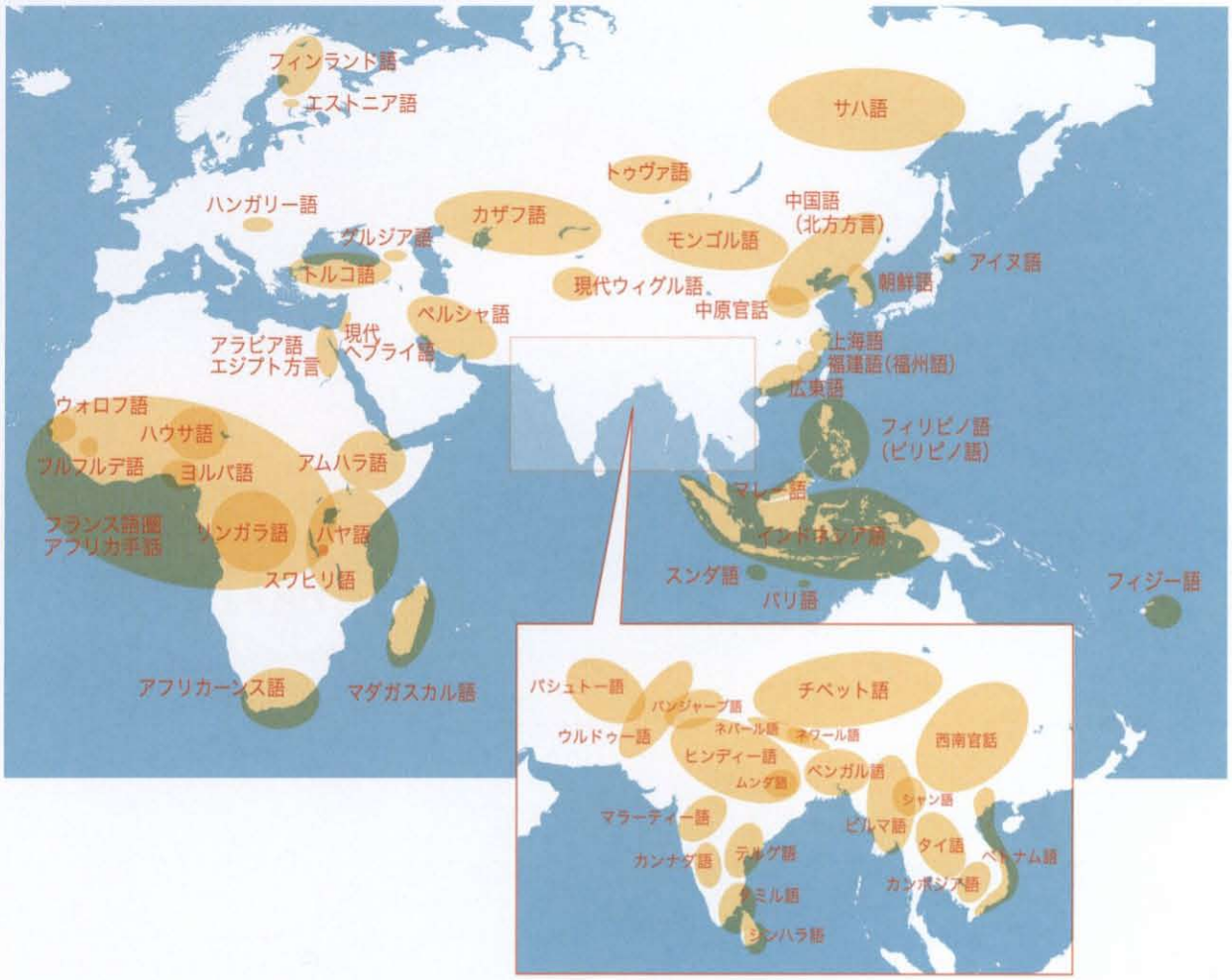
今年度は、モンゴル語、フランス語圏アフリカ手話(以上東京会場)、トゥヴァ語(関西会場)の研修を実施します。

実施にあたっては、語学教育に造詣の深い所外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、教授法、実施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。関西会場の研修のうち大阪で実施されるものは、大阪大学世界言語研究センターの協力を得て行われます。

研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了書が授与されます。なお、本研究所は、名古屋学院大学及び清泉女子大学と単位互換協定を結んでおり、研修を修了すると、それぞれの大学の卒業単位として認定されます。

また、2006(平成18)年度より東京外国語大学外国語学部および大学院地域文化研究科の開講科目となりました。

■過去に研修を実施した言語



グローバルCOE拠点形成プログラム

コーパスに基づく言語学教育研究拠点（略称CbLLE）

「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」(CbLLE)は、東京外国語大学院地域文化研究科とAA研との連携による「グローバルCOE」(GCOE)プログラムとして、2007(平成19)年度から5年間の予定で実施されている拠点形成プログラムです。

ここでいう「コーパス」とは、話し言葉や書き言葉をはじめとする言語資料に、発音・文法・方言・文体・機能など、言語分析に必要な情報(タグ)を加えて構造化したデータの集合体を指します。そして、「コーパスに基づく言語学」とは、自然言語処理を中心とするコーパス言語学よりも広い意味での「コーパスデータに基づいた、実証的、経験主義的な言語研究」を意味します。

CbLLEでは、「フィールドからコーパス構築へ、さらに教室での応用へ」をスローガンとして、フィールドでの一次資料収集、デジタル化、コーパス構築、コーパスの言語学的な分析から言語教育への応用を一貫したプロセスと捉え、そのための研究、教育、開発環境の充実を目指します。

上記の目標を達成するために、次の3つの班を組織します。

●フィールド言語学班：記述研究が十分進んでいない言語を記述し、コーパスの構造について指針を与えるような研究を行います。

●コーパス言語学班：一定の記述はなされているが、言語資料のデジタル化が未発達な言語を対象に、コーパスの構築と、機械可読辞書(MRD)など言語資料を扱うのに不可欠なツールの開発に資する研究を行います。

●言語情報学班：資料のデジタル化が十分進んだ言語を対象に、分析ツールの開発、機能別コーパスの構築、コーパスを利用した言語教育法や教材の開発といった応用研究を行います。

研究の成果をもとに、フィールド言語学、コーパス言語学、言語情報学の三分野の手法をバランス良く習得した人材の育成を行うことも、CbLLEの主要な目的の1つです。そのために、次のような教育プログラムを実施しています。

●主として博士後期課程の院生を対象に自主的研究プロジェクトを公募し、国内外での言語調査や外国語教育の現場でコーパスの構築とその利用の実践経験を積ませます。ここから得られた研究成果と分析上のノウハウもまたCbLLEという教育研究拠点の「資産」となります。

●3つの分野の一線の研究者と大学院生が共同して講演・研究発表を行います。

●若手研究者による研究成果を、国内外の学会で発表させるための支援を行います。

言語ダイナミクス科学研究プロジェクト

Fieldling：記述言語研究コミュニティー

Fieldlingは、記述言語学に携わる若手フィールドワーカーが主体となって所属研究室の枠を超えた協力体制を構築するための研究プロジェクトです。2005(平成17)年にAA研を基地として活動を開始して以降、メンバー自身の企画・提案により、さまざまな研究会やワークショップを行なっています。2008(平成20)年度からは、言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(p.23参照)の枠内に運営基盤を置き、これまで以上に活発な活動を予定しています。

主な活動には、(1)各メンバーが研究対象の言語データを持ち寄り、具体的なトピックに絞って議論する研究会、(2)分析のスキルアップを目的としたワークショップ、(3)現地調査で得た資料や研究成果の刊行、(4)フィールドワーカー同士が情報・知識を交換できる記述言語研究コミュニティー・ウェブサイトの構築と運営、(5)言語の記述的研究について広く理解してもらうための一般向けウェブサイトの運営、などがあります。

■『文法を描く－フィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチ－』：実際に収集したデータをもとに、各メンバーが専門としている言語の姿を、言語の概略、音声・音韻、形態論、文の構造、テキスト資料という項目に分けて、1言語につき30ページ程度でまとめました。現在第2集まで刊行しています。

■Documentary Linguistics Workshop：2008(平成20)年2月にロンドン大学SOASより2名の講師を迎え、ワークショップを開催しました。このワークショップは今後も定期的に開催し、若手フィールドワーカーが研究に必要な学問的・技術的知識を身につける場としていきます。

記述言語研究コミュニティー・サイト http://main.fieldling.jp
Fieldling Blog http://fieldling.aacore.jp/

出版物

本研究所では、言語研修、辞典編纂事業、個人研究、および共同研究プロジェクトを通じたさまざまな研究成果を、数多く出版して公開しています。出版物の一覧は、本研究所ホームページの中の「AA研の出版物」欄もしくは、2006年度出版分までは「出版物目録2007」でご覧になることができます。一部の出版物については、同ホームページでpdfでご覧になることもできます。

お問い合わせは、出版事務担当 (publ@aa.tufs.ac.jp) までお願いいたします。

■逐次刊行物

□学術雑誌

『アジア・アフリカ言語文化研究』(Journal of Asian and African Studies) を年に２回発行しています。所外の研究者を含む編集委員会によって運営され、毎号、査読を経た水準の高い言語学・歴史学・文化人類学に関する論文が掲載されています。海外からの投稿も多数あり、国内外から高い評価を得ています。73～74号では、世界8の国と地域から41名(うち、海外14名)の投稿がありました。(採用論文は右のとおり)

62号からは、本研究所ウェブサイトにおいてpdfで閲覧できます。また、東京外国語大学付属図書館「東京外国語大学学術成果コレクション」(http://repository.tufs.ac.jp/doc/) において、閲覧、ダウンロードできる論文もあります。

表紙デザインはグラフィックデザイナーの杉浦幸平氏によるものです。

■2008(平成20)年度編集委員会委員

上岡　弘二 (東京外国語大学・名誉教授)
梶　茂樹 (京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授)
鷹木　恵子 (桜美林大学・国際学部・教授)
石川　登 (京都大学・東南アジア研究所・准教授)
小谷　汪之 (東京都立大学・名誉教授)
新免　康 (中央大学・文学部・教授)

■2007年度刊行分

□73号

論文

- 太田信宏　「近世南インド・マイソール王国の宮廷文学における王の表象：『チッカデーヴァラージャ・サプタパティ』の紹介と分析」
- 津田浩司　「華人国家英雄」の誕生?：ポスト・スハルト期インドネシアにおける華人性をめぐるダイナミズム」
- 片岡樹　「山地からみた中緬辺疆政治史：18–19世紀雲南西南部における山地民ラフの事例から」
- 橋誠　「辛亥革命後における内モンゴルの二元的政治構造：二ザサグ制をめぐって」
- 五十嵐大介　「ザヒーラ考：後期マムルーク朝のスルターン財政」
- 藤波伸嘉　「オスマン・アラブ人の「オスマン国民」像：アブデュルハミト・ゼフラーヴィーの「諸民族の統一」論」

資料

- 新谷忠彦　「センウィー・クロニクルに見られる「タイ国」像(II)：精霊信仰と星占い」

□74号

論文

- GOYVAERTS,Didier　"Bukavu Swahili：Tense, Aspect and Blurry History"
- 津田浩司　「影の華人組織」の成立と消滅：体制転換期インドネシアの華人ネットワークと想像されるコミュニティ」
- 鈴木博之　「チベット語包座［Babzo］方言の音声分析とその方言特徴」
- 井上さゆり　「ビルマ古典歌謡におけるジャンル区分の形式：貝葉写本における歌謡集の分析を中心として」

資料

- 高村加珠恵　「インフォーマルな越境が日常化する空間のメカニズム：タイ・マレーシア国境東部からの考察」

□ニュースレター

『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』を年に３回発行してきました。本研究所所員や共同研究員などによるフィールドでの経験をもとにしたエッセイ、本研究所が主催した活動の報告、学会などにおける最新の研究動向の紹介、AA研で出版された新刊書の紹介などが掲載されています。102号からは、本研究所ホームページにおいてpdfで閲覧できます。

表紙「通信」の題字は、初代所長を務めた岡正雄(在任1964～72年)の筆によるものです。

■各種出版物

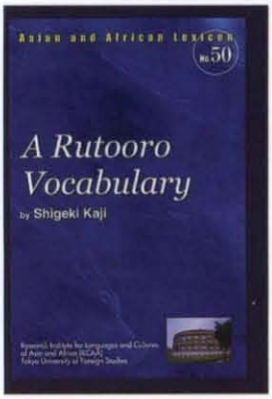
研究所では、以下の様々な研究活動の成果を出版しています。2007(平成19)年度には、P53のとおり出版しました。

□アジア・アフリカ言語文化叢書

本研究所を代表する知的成果を誇る出版物です。所内外の研究者による査読を経て、年に1－2点ずつ出版されています。

□言語研修テキスト

本研究所が毎年開催する夏期言語研修で使用したテキストです。将来のよりよき教材作成のための材料としても生かされます。



□アジア・アフリカ基礎語彙集

アジア・アフリカの様々な地域で実施された言語調査を元に作成された語彙集です。

□共同研究成果出版物

本研究所では、共同研究プロジェクトや中東イスラーム研究教育プロジェクト、所員が外部資金を獲得して行っている研究などの成果を出版しています。

企画展/WEB

2007(平成19)年度に行われた企画展には、下記のようなものがあります。

□「鮮麗なる阿富汗一八四八
　—石版画にみるアフガニスタンの風俗と習慣」
　(2007/10/29〜12/24 AA研1F展示スペース)

日本で唯一AA研が所蔵するアフガニスタンに関する1848年に作成されたリトグラフ(石版)画の高精度デジタル複製を展示する企画で、中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として行われました。また、11月10日(土)には、記念国際シンポジウム「アフガニスタン近代史再考—ラットレーの石版画展」がAA研大会議室で開催されました。

□「中国古文字の世界
　—図版にみる先秦漢字の芸術と歴史」
　(2007/7/2〜8/10 AA研1F展示スペース)

徽章文字・甲骨文・金文・戦国文字と秦系文字の写真パネルを展示しました。詳細は、展示目録『中国古文字の世界—図版にみる先秦漢字の芸術と歴史』(2007年8月修訂版)およびURL:http://www.aa.tufs.ac.jp/komonji/をご覧ください。

□「好奇字展—漢字と東アジアの文字周遊」
　(2007/2/13〜3/23, 2007/4/9〜4/20
　AA研1F展示スペース)

漢字を中心とした東アジアの文字文化とそれらの研究活動を、本学の所蔵する貴重な書籍、文字と文化を解説したパネル、一般の方にも親しみやすい装飾品を通して、広く紹介することを目的とした企画です。好評につき期間を延長しました。

■ウェブサイト

本研究所のウェブサイト(http://www.aa.tufs.ac.jp/)では、共同研究を柱とした研究活動の詳細、所員が中心となって推進している大規模なプロジェクトの情報、研究会の案内・記録、研究所刊行物の一覧など、最新の情報を提供しています。さらに、様々なデータベースや辞書、コーパスなど、オンラインで使える研究資料も多数公開しています。

また、研究成果の社会還元の一環として、一般向けコンテンツの制作にも積極的に取り組んでいます。特にここ数年折に触れて開催している企画展のウェブサイトは好評を博しています。

役職・所内委員

■所長・副所長・センター長（任期：～2009年3月）

所長(併任)：大塚　和夫
副所長(併任)：峰岸　真琴
情報資源利用研究センター長(併任)：栗原　浩英
フィールドサイエンス研究企画センター長(併任)：黒木　英充

■所内委員会（任期：2007年4月～2009年3月）

□企画運営委員会
大塚　和夫(委員長)
栗原　浩英
黒木　英充
クリスチャン・ダニエルス
中谷　英明
中山　俊秀
稗田　乃
三尾　裕子
峰岸　真琴

□自己評価委員会
中谷　英明(委員長)
飯塚　正人
大塚　和夫
栗原　浩英
黒木　英充
高島　淳
永原　陽子
深澤　秀夫
峰岸　真琴

□将来計画検討委員会
中山　俊秀(委員長)
大塚　和夫
栗原　浩英
黒木　英充
近藤　信彰
西井　涼子
星　泉
真島　一郎
峰岸　真琴

研究スタッフ（2008年5月1日現在）

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

教　授

飯塚　正人 *IIZUKA, Masato*

1. イスラーム学・中東地域研究
2. 1）9.11後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究(科学研究費補助金)
   2）近現代イスラームの思想と運動の研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~masato/intro_me.html

大塚 和夫 *OHTSUKA, Kazuo*

1. 社会人類学、中東民族誌学
2. 1）中東を中心としたムスリム社会の人類学的研究
   2）共同研究プロジェクト「ムスリムの生活世界とその変容」

栗原 浩英 *KURIHARA, Hirohide*

1. ベトナム現代史
2. 1）ベトナム・中国関係の歴史的変遷(1950年～現在)
   2）冷戦時代の社会主義体制に関する総合的研究

研究スタッフ(2008年5月1日現在)

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

教　授

クリスチャン・ダニエルス *DANIELS, Christian* 漢名：唐　立

1. 中国西南部：タイ文化圏の歴史
2. 1）タイ文化圏における山地民の歴史的研究(AA研共同研究プロジェクト)
   2）言語・文化調査に基づくパラウン史の解明

黒木 英充 *KUROKI, Hidemitsu*

1. 中東地域研究・東アラブ近代史
2. 1）オスマン期シリアの都市社会の変容過程に関する基礎研究
   2）東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/

芝野　耕司 *SHIBANO, Kohji*

1. マルチメディアデータベース、多言語情報処理、CALL
2. マルチメディアデータベース言語設計、日本語組版、コンピュータ支援による言語教育環境及び
   e-learning環境の研究

新谷　忠彦 *SHINTANI, Tadahiko L. A.*

1. 言語音変化の類型的研究
2. 1）タイ文化圏の総合的研究
   2）野鶏の家禽化に関する研究
   3）オセアニア諸語の研究

高島　淳 *TAKASHIMA, Jun*

1. 宗教学・インド宗教史（ヒンドゥー教）、言語情報処理
2. 1）シヴァ教の儀礼と思想についての研究
   2）多言語処理システムの開発研究
   3）インド聖典データベースの構築
   4）ヒンドゥー教における宗教的空間についての研究
   5）マルセル・モースとインドの宗教についての研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/index.html

豊島　正之 *TOYOSHIMA, Masayuki*

1. 中世日本語文献学(特にキリシタン文献)
2. 1）宣教に伴う言語学(Missionary Linguistics)関連辞書・文法書統合化研究
   2）漢字字体史研究のための関連資料研究(GICAS)
   3）極初期録音音源による百年前の言語音声と書記記録との関係の研究(GICAS)
3. http://www.joao-roiz.jp/mtoyo/

教 授

中谷　英明 *NAKATANI, Hideaki*

1. インド仏教学・中期インド語学・総合人間学
2. 1）インド古典文献学：インド古典語・中期インド語・インド古典韻律の研究
   2）インド古代思想研究：バラモン教・インド仏教の哲学的解明
   3）総合人間学：「総合人間学の構築」（AA研共同研究プロジェクト）
3. http://www.classics.jp/GSH/

永原　陽子 *NAGAHARA, Yoko*

1. 南部アフリカの歴史
2. 1）植民地期ナミビア史の研究
   2）南部アフリカ地域史の研究
   3）脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究
   （AA研共同研究プロジェクトおよび科学研究費補助金）

中見　立夫 *NAKAMI, Tatsuo*

1. 東アジア・内陸アジアの国際関係史
2. 1）「東アジアの社会変容と国際環境」プロジェクト（AA研共同研究プロジェクト）
   2）台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵満洲語文書の研究（中央研究院歴史語言研究所）
   3）ロシア帝国と「東南アジア」の成立－国際関係史の立場から－（科学研究費補助金）

稗田　乃 *HIEDA, Osamu*

1. アフリカの言語学
2. 1）ウガンダのナイル諸語の調査と記述
   2）ナイル諸語比較語彙集の作成（科学研究費補助金）
   3）ドイツに保存されているナイル諸語資料の収集と整理

深澤　秀夫 *FUKAZAWA, Hideo*

1. マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
2. 1）マダガスカル北西部農村における会話と相互行為の実地調査（科学研究費補助金）
   2）マダガスカルにおける〈移葬〉についての実地調査
   3）ホームページの改訂
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/

ペーリ・バースカララーオ *BHASKARARAO, Peri*

1. 南アジアの諸言語、音声学
2. 南インド、ニルギリ地域の諸言語研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~bhaskar/index.html

研究スタッフ（2008年5月1日現在）

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

教　授

町田　和彦 *MACHIDA, Kazuhiko*

1. 南アジアの言語学
2. 1）インド系文字の構造と歴史(GICAS)
   2）ヒンディー語電子辞書(GICAS)
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/

三尾　裕子 *MIO, Yuko*

1. 東アジアの人類学
2. 1）台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究(科学研究費補助金)
   2）中国系移民研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/

峰岸　真琴 *MINEGISHI, Makoto*

1. 東南アジア、南アジアの言語学および言語類型論
2. 1）孤立語を視野に入れた言語基礎論・言語類型論の研究
   2）コミュニケーションとその障害に関する研究
   3）タイ、インドの少数民族言語の研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/index-j.html

宮崎　恒二 *MIYAZAKI, Koji*

1. インドネシア社会
2. 1）国際移住に関する文化人類学的研究（科学研究費補助金）
   2）インドネシア文献学の研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmiya/profile-sjis.html

准教授

荒川　慎太郎 *ARAKAWA, Shintaro*

1. 西夏語学、西夏語文献学
2. 1）西夏語文献の言語学的研究
   2）西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究（科学研究費補助金）
   3）遼・金・西夏に関する総合的研究（言語部門統轄）（共同研究プロジェクト）
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~arakawa/index.html

太田　信宏 *OTA, Nobuhiro*

1. 南アジアの歴史
2. 1）近世南アジアにおける王権の研究
   2）南インド史上の諸社会集団・組織の研究
   3）前近代カンナダ語文学の研究

小田　淳一 *ODA, Jun'ichi*

1. 計量文献学
2. 1）民話の計量的比較研究
   2）情報修辞学
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/index.html

河合　香吏 *KAWAI, Kaori*

1. 人類学、東アフリカ牧畜民研究
2. 1）東アフリカ牧畜民の遊動再考
   2）「集団」概念の進化史的基盤研究（AA研共同研究プロジェクト）

呉人　徳司 *KUREBITO, Tokusu*

1. 言語学、チュクチ語、モンゴル語
2. 1）海岸チュクチとトナカイ・チュクチに関する言語学、言語人類学的研究
   2）消滅の危機に瀕している言語に関するより効率的な調査・記述方法の研究
   3）言語類型論の研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/

近藤　信彰 *KONDO, Nobuaki*

1. イラン近代史
2. 1）宗教寄進文書の分析による19世紀テヘランの都市史研究
   2）シーア派の法的勧告と法廷文書に関する研究
   3）近世・近代ペルシア語文化圏における言語・民族・国家形成（科学研究費補助金）

研究スタッフ (2008年5月1日現在)

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

准 教 授

澤田　英夫 *SAWADA, Hideo*

1. カチン州および東北インドのチベット＝ビルマ系言語の記述的研究
2. 1）ロンウォー(マル)語の文法記述
   2）「東南アジア諸文字の源流と発展」(GICAS)の調査で得た東南アジア大陸部インド系文字碑文画像データの整備
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/

塩原　朝子 *SHIOHARA, Asako*

1. 言語学、インドネシア諸言語の記述的研究
2. ヌサトゥンガラ諸島の言語(バリ語、スンバワ語、クイ語(アロール)など)の記述
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/profile-sjis.htm

陶安　あんど *SUEYASU/HAFNER, Arnd Helmut*

1. 法社会学、中国法制史と中国古文字学
2. 1）秦漢刑罰体系の研究
   2）金文法制資料の研究
   3）中国古文字偏旁体系の研究

髙知尾　仁 *TAKACHIO, Hitoshi*

1. 文化人類学・人類学精神史
2. 1）ジェイムズ・フレイザー研究
   2）心身論の再考察
   3）imperiumの言説と表象に関する基本研究

髙松　洋一 *TAKAMATSU, Yoichi*

1. オスマン朝史、古文書学、アーカイブズ学
2. 1）オスマン朝文書諸類型の機能論的研究
   2）オスマン朝におけるアーカイブズ管理の研究

床呂　郁哉 *TOKORO, Ikuya*

1. 東南アジア島嶼部の人類学
2. 1）東南アジアのイスラームに関する研究
   2）真珠を含む小生産物の研究
   3）「海賊」に関する歴史人類学的研究

准教授

中山　俊秀 *NAKAYAMA, Toshihide*

1. ワカシュ諸語（北米北西海岸）、形態・統語論、言語類型論
2. 1）形態的複雑性の類型と分布に関する通言語的研究
   2）ヌートカ語の複統合的語形成に関する研究
3. http://nakayama.aacore.jp/

西井　凉子 *NISHII, Ryoko*

1. 東南アジア大陸部の人類学
2. 1）社会空間の人類学的研究
   2）タイにおけるムスリムの研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~rnishii/

星　　泉 *HOSHI, Izumi*

1. チベット文化圏の言語学
2. 1）古代から現代までのチベット語における文法化の研究
   2）チベット語辞典編纂
   3）古代チベット語テキスト研究
3. 研究室 http://hoshi.aacore.jp/　古代チベット語文献オンライン http://otdo.aa.tufs.ac.jp

真島　一郎 *MAJIMA, Ichiro*

1. 西アフリカの人類学
2. 1）個体形成論の考察
   2）沖縄戦後思想史における文化と暴力の研究
   3）マルセル・モース研究
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/profile.html

渡辺　己 *WATANABE, Honoré*

1. セイリッシュ語
2. 1）スライアモン・セイリッシュ語の記述的研究
   2）複統合的言語の類型論的研究

研究スタッフ (2008年5月1日現在)

1. 研究分野・領域　2. 今年度の研究課題　3. ホームページ

助　教

伊藤　智ゆき *ITO, Chiyuki*

1. 音韻論、歴史言語学、朝鮮語、中国語中古音
2. 1）朝鮮語声調の総合的研究
   2）19世紀中国語－朝鮮語対音の音韻論的研究

椎野　若菜 *SHIINO, Wakana*

1. 社会人類学、東アフリカ民族誌
2. 1）寡(やもめ)の処遇とその生活実践に関する研究
   2）「シングル」に関する研究
   3）性（セクシュアリティ／ジェンダー）に関する研究
   4）居住集団と居住形態に関する研究
   5）生業活動、物質文化(壺づくり)とジェンダーに関する研究

角谷　征昭 *KADOYA, Masaaki*　＊2005. 9. 1～2008. 8. 31

1. バンツー諸語
2. マリラ語とニハ語(タンザニア)の記述および対照研究

亀井　伸孝 *KAMEI, Nobutaka*　＊2007. 9. 1～2010. 8. 31

1. 文化人類学、地域研究（主にアフリカを対象）
2. 1）2008年度言語研修「フランス語圏アフリカ手話」講師
   2）フランス語圏アフリカ手話の映像データベース作成
   3）アジア・アフリカの手話言語に関する情報の収集と公開
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~kamei/index.html

塩谷　もも *SHIOYA, Momo*　**産学官連携研究員（東南アジアのイスラーム）**＊2006. 11. 1～2009. 3. 31

1. インドネシアの人類学
2. 1）相互扶助とコミュニティ意識に関する研究
   2）ジャワにおけるイスラームと儀礼変化についての研究

非常勤研究員

*は本研究所での研究期間を表す

永山　ゆかり *NAGAYAMA, Yukari*　＊2007.9.1～2010.8.31

1. アリュートル語の文法記述
2. アリュートル語資料の整理、分析

錦田　愛子 *NISHIKIDA, Aiko*（中東・イスラーム研究教育プロジェクト）＊2007.4.1～2010.3.31

1. 中東地域研究
2. 1）離散パレスチナ人の帰属意識についての研究
   2）中東をめぐる映像メディアに関する研究

吉村　貴之 *YOSHIMURA, Takayuki*（中東・イスラーム研究教育プロジェクト）＊2008.4.1～2010.3.31

1. アルメニア近現代史
2. ソヴィエト・アルメニアにおける本国と在外同胞との関係
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/aa-projects_yoshimura.html

渡部　良子 *WATABE, Ryoko*　＊2006.12.1～2009.11.30

1. 歴史学・前近代イラン
2. 1）ペルシア語の伝統的書記術観とその変容
   2）モンゴル時代のイラン社会・文化史

研究スタッフ (2008年5月1日現在)

1. 研究分野・領域　2. 研究課題

外国人研究員

*は出身国と本研究所での研究期間を表す

BHATIA, Tej Krishan(バーティヤ・テージ・クリシャン) (受入教員：町田　和彦)

1. 言語学
2. ヒンディー語文法史

*米国　2007.12.1～2008.8.31

DIFFLOTH, Gérard Félix(ディフロス・ジェラール・フェリックス) (受入教員：澤田　英夫)

1. 言語学
2. オーストロアジア比較言語学におけるExpressiveの位置づけと役割

*フランス　2007.3.1～2008.8.31

IMAEDA, Yoshiro(今枝 由郎(イマエダ・ヨシロウ)) (受入教員：星　泉)

1. チベット歴史・文献学
2. 古代チベット語文献オンライン・プロジェクトのデータベース構築と検索・配列・閲覧機能の拡充

*フランス　2008.2.1～2008.7.31

LI,li(李 力(リ・リョク)) (受入教員：陶安　あんど)

1. 中国法政史
2. 張家山漢竹簡『二年律令』・『奏讞書』の総合的研究

*中国　2007.9.1～2008.8.31

YIN, Shaoting(尹　紹亭(イン・ショウテイ)) (受入教員：クリスチャン・ダニエルス)

1. 歴史・人類学
2. 雲南山地民の生態環境史

*中国　2007.9.1～2008.8.31

関連資料

[AA研と外国研究機関との学術協定]

締結年	国	機　関	共同研究締結内容	協力する分野
2008	マレーシア	サバ開発研究所	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とサバ開発研究所との間における学術協力・学術交流に関する合意覚書	現地研究拠点活動に係る専門分野
2007	ドイツ	ケルン大学 アフリカ学研究所	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とケルン大学アフリカ学研究所との間における学術交流に関する協定書	アフリカ言語学、 アフリカ人類学
2005	インド	高等コンピューティング 開発センター(CDAC)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所および高等コンピューティング開発センター(CDAC)間の学術協定に関する申し合わせ覚書	言語解析、情報学
2005	フランス	パリ人間科学館(MSH)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所および人間科学館(MSH)との学術協力協定	総合人間学
2005	レバノン 共和国	レバノン大学 人文科学部第1部 (FHS-I-LU)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とレバノン大学人文科学部第1部との学術協力に関する申し合わせ	現地研究拠点活動に 係る専門分野
2005	レバノン 共和国	ドイツ東洋学会ベイルート・ ドイツ東洋学研究所(OIB)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とドイツ東洋学会ベイルート・ドイツ東洋学研究所との学術協力に関する申し合わせ	現地研究拠点活動に 係る専門分野
2005	レバノン 共和国	ベイルート・ アメリカン大学（AUB）	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とベイルート・アメリカン大学との学術協力に関する申し合わせ	人文科学、社会科学、 自然科学
2004	コート ディヴォワール 共和国	アフリカ 演劇コミュニケーション 研究・育成・創成センター (CARAS)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とアフリカ演劇コミュニケーション研究・育成・創成センター(CARAS)との学術協力に関する同意書	内戦・民族紛争など 人間の安全保障をめぐる 緊急の課題

関連資料

[AA研と外国研究機関との学術協定]

締結年	国	機関	共同研究締結内容	協力する分野
2004	オーストリア	オーストリア 科学アカデミー(AAS)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とオーストリア科学アカデミーとの学術協力に関する覚え書	インド学、仏教学、 文献情報学
2000	インドネシア	インドネシア科学院 社会文化研究センター (PMB-LIPI)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とインドネシア科学院社会文化研究センターとの学術協力に関する覚え書	文化人類学
1997	ラオス	文化研究所(IRC)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と文化研究所との間の学術協力に関する協定書	人文科学のすべての分野、 及びこれに関連する分野
1996	イラン	農業計画・ 経済研究センター (C.A.P.E.S.)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所と農業計画・経済研究センター(C.A.P.E.S.)との間の研究協力協定書	イラン文化・日本文化
1988	マリ	人文科学研究所 (ISH)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とマリ共和国人文科学研究所との間の学術協力に関する協約書	人文科学のすべての分野、 及びこれに関連する分野
1988	フランス	チベット言語文化研究所 (LCAT)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とフランス共和国チベット言語文化研究所(略称LCAT)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびチベット語と日本語に関連したその他の専門分野
1987	インド	インド統計研究所(ISI)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とインド共和国インド統計研究所(略称ISI)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびインド諸語と日本語に関連したその他の専門分野
1987	インド	文部省インド諸語 中央研究所(CIIL)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とインド国文部省インド諸語中央研究所(略称CIIL)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびインド諸語と日本語に関連したその他の専門分野
1978	カメルーン	国立科学技術研究機構 (ONAREST) (現・高等教育・情報科学・科学研究省(MESIRES))	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とカメルーン連合共和国立科学技術研究機構との間の科学的協力に関する同意書	人文科学の総ての分野、 特に社会学、言語学、歴史学、 民族学

[研究者招へい]

□外国人客員　2006-2008(平成18-20)年度

受入年度	氏　名	国　籍	研究分野	受入教員
2008	KENSTOWICZ, Michael John	アメリカ	言語学	伊藤　智ゆき
	WITZEL, Michael	ドイツ	言語学	中谷　英明
	di COSMO, Nicola	イタリア	東アジア史・中央ユーラシア史	中見　立夫
	VOSSEN, Rainer	ドイツ	言語学	稗田　乃
	HEINE, Bernd Ruediger	ドイツ	言語学	稗田　乃
	NOORHAIDI, Hassan	インドネシア	人類学・イスラーム研究	床呂　郁哉
2007	李　力	中国	中国法制史	陶安　あんど
	尹　紹亭	中国	歴史・人類学	クリスチャン・ダニエルス
	KANAFANI-ZAHAR, Aida	フランス	社会学・人類学	黒木　英充
	BHATIA, Tej Krishan	フランス	言語学	町田　和彦
	IMAEDA, Yoshiro	アメリカ合衆国	チベット歴史・文献学	星　　泉
	DIFFLOTH, Gérard Félix	フランス	言語学	澤田　英夫
2006	MILNER, Anthony	オーストラリア	東南アジア史学	床呂　郁哉
	BEISEMBIEV, Timur Kasymovich	カザフスタン	歴史学	羽田　亨一
	董　珊	中国	中国古文字学・考古学	陶安　あんど
	JANHUNEN, Juha	フィンランド	言語学・民族史	呉人　徳司
	LESTEL, Dominique Pierre	フランス	動物行動学、哲学・認知心理学	中谷　英明

[フェロー　2006-2008(平成18-20)年度]

※2008年7月現在

受入年度	氏　名	国籍(外国人フェロー)／所属(日本人フェロー)	研究分野	受入教員
2008	清水　明俊	元・一橋大学教授	社会人類学	宮崎　恒二
	新江　利彦		歴史学	三尾　裕子
	川床　睦夫	元・中近東文化センター	考古学	飯塚　正人
	丹菊　逸治		口承文学	峰岸　真琴
	辛嶋　博善*		人類学	河合　香吏
	藤野　陽平*		人類学	三尾　裕子
2007	清水　昭俊	元・一橋大学教授	社会人類学	宮崎　恒二
	石井　溥	元・ＡＡ研教授	人類学	三尾　裕子
	内堀　基光	放送大学教授	民族学、人類学	小川　了
	川田　順造	元・ＡＡ研教授	人類学	小川　了
	Matthew William Mosca	アメリカ合衆国	歴史学	クリスチャン・ダニエルス
	髙松　洋一		歴史学	近藤　信彰
	Ayisima Miersulitan	中国	言語学	稗田　乃
	新江　利彦		歴史学	クリスチャン・ダニエルス
	川床　睦夫	元・中近東文化センター	考古学	飯塚　正人
	丹菊　逸治		口承文学	峰岸　真琴
	Christopher I.Beckwith	インディアナ大学教授	言語学	星　　泉
2006	清水　昭俊	元・一橋大学教授	社会人類学	宮崎　恒二
	Naw Si Blut	ミャンマー	政治史研究	根本　敬
	石井　溥	元・ＡＡ研教授	人類学	三尾　裕子
	内堀　基光	放送大学教授	民族学・人類学	小川　了
	Massoud Daher	レバノン	歴史学	黒木　英充
	Abdallah Said	レバノン	経済史	黒木　英充
	川田　順造	元・ＡＡ研教授	人類学	小川　了
	Matthew William Mosca	アメリカ合衆国	歴史学	クリスチャン・ダニエルス

*はジュニアフェロー

関連資料

[研究未開発言語文化の調査事業による派遣者]

派遣期間	派遣された研究者	
2007-2008	伊藤　智ゆき（米国）	クリスチャン・ダニエルス（タイ、中国）
2006-2008	河合　香吏（ケニア、ウガンダ）	
2005-2006	角谷　征昭（タンザニア）	
2003-2005	陶安　あんど（イギリス、フランス、中国）	太田　信宏（イギリス、インド）
2001-2003	床呂　郁哉（スペイン、オランダ）	呉人　徳司（アメリカ、ロシア）
1999-2001	澤田　英夫（オーストラリア、インド）	本田　洋（韓国、イギリス）
1997-1999	吉澤　誠一郎（フランス、イギリス、中国、台湾）	西井　凉子（タイ、イギリス）
1995-1997	飯塚　正人（エジプト、イギリス）	黒木　英充（シリア、フランス）
1993-1995	新免　康（中国、独立国家共同体、イギリス）	根本　敬（イギリス、ビルマ）
1991-1993	栗原　浩英（ベトナム、ロシア）	峰岸　真琴（インド）
1989-1991	林　徹（中国、トルコ）	栗本　英世（エチオピア、ケニア）
1987-1989	松村　一登（フィンランド、ソ連）	宮崎　恒二（オランダ、インドネシア）
1985-1987	中見　立夫（中国、モンゴル）	梶　茂樹（ザイール、ケニア、ザンビア）
1983-1985	辻　伸久（中国、香港）	水島　司（インド）
1981-1983	山本　勇次（ネパール）	新谷　忠彦（ニューカレドニア）
1979-1981	羽田　亨一（イラン、トルコ）	清水　宏祐（アラブ連合、イラン、トルコ）
1977-1979	石井　溥（ネパール）	藪　司郎（ビルマ）
1975-1977	加賀谷　良平（ボツワナ）	湯川　恭敏（タンザニア、ザイール）
1973-1975	福井　勝義（ソマリア）	中嶋　幹起（香港）
1971-1973	内藤　雅雄（インド）	中野　暁雄（モロッコ、南イエメン）
1969-1971	松下　周二（ナイジェリア）	家島　彦一（アラブ連合）
1967-1969	石垣　幸雄（エチオピア）	守野　庸雄（タンザニア）

[これまで言語研修を開講した言語]

( ) 内は修了者数

年度	東京会場	関西会場
2008	モンゴル語、 フランス語圏アフリカ手話	トゥヴァ語
2007	マレー語(10)、現代ウイグル語(10)	広東語(11)
2006	リンガラ語(4)、 サハ(ヤクート)語(10)	朝鮮語中級(5)
2005	ベトナム語中級(4)、シンハラ語(3)	ヒンディー語(8)
2004	ビルマ語中級(6)、ベンガル語(11)	カザフ語(3)
2003	マダガスカル語(11)、スンダ語(5)	ベトナム語(11)
2002	ネワール語(8)、パリ語(7)	タイ語(7)
2001	パシュトー語(7)、福州語(10)	ムンダ語(3)
2000	シャン語(3)、アフリカーンス語(6)	ペルシア語(4)
1999	フィジー語(4)、ペルシア語(10)	ウルドゥー語(5)
1998	アイヌ語(2)、ハヤ語(11)	カンナダ語(5)
1997	テルグ語(10)、モンゴル語(11)	ハンガリー語(7)
1996	タイ語(14)、現代ヘブライ語(12)	ヨルバ語(7)
1995	アムハラ語(5)、チベット語(25)	上海語(12)
1994	ウォロフ語(9)、ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1993	朝鮮語(17)、グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1992	ネパール語(12)、 アラビア語エジプト方言(15)	フィリピノ語(12)
1991	エストニア語(12)、ビルマ語(15)	中国語(13)
1990	朝鮮語(11)、インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1989	ベンガル語(20)、ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)

年度	東京会場	関西会場
1988	ペルシャ語(10)、トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1987	中原官話(10)、タイ語(19)	シンハラ語(8)
1986	西南官話(5)、タミル語(12)	ベンガル語(8)
1985	朝鮮語(14)、カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12)、 ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1983	チベット語(12)、フィンランド語(21)	パンジャーブ語(8)
1982	アラビア語エジプト方言(12)、 ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1981	ヒンディー語(8)、パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1980	ネパール語(14)、モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1979	ハウサ語(8)、ビルマ語(14)	タイ語(7)
1978	タイ語(12)、トルコ語(12)	ペルシア語(13)
1977	広東語(14)、マラーティー語(6)	モンゴル語(18)
1976	ペルシア語(10)、スワヒリ語(9)	ビルマ語(5)
1975	カンボジア語(8)、ベンガル語(12)	
1974	朝鮮語(10)、チベット語(12)	

関連資料

■AA研所員を主任指導教員とする博士学位取得者 2005-2008(平成17-20)年度

授与日	学位取得者名	学位論文題目	担当所員
2008.2.20	山田　重周	バサリ社会の仮面 ―仮面及びその語り口の変化に関する民族誌的研究―	小川　了
2007.6.27	林　虹瑛	台湾閩南語音韻研究 ―梧棲鎮閩南語を中心に	梶　茂樹
2007.6.27	檜垣　まり	タンザニア、ダルエスサラームにおけるスワヒリ歌謡、ターラブの誕生と変容	梶　茂樹
2007.2.21	椙沢　英雄	ゴトン・ロヨン思想　―インドネシア・ナショナリズムの思想として―	根本　敬
2006.9.20	神谷　俊郎	バツァ語の記述研究　―その音声、音韻、文法―	梶　茂樹
2006.7.26	古閑　恭子	アカン語アシャンティ方言の研究　―特に音韻を中心として―	梶　茂樹
2006.7.26	結城　佐織	満州語文語における形態と音韻について　―『満文金瓶梅』を中心に―	梶　茂樹
2006.2.8	阿部　優子	ベンデ語(バントゥF, 12, タンザニア)の記述研究　―音韻論、形態論を中心に―	梶　茂樹
2006.2.8	李　敬淑	発話速度と促音の生成に関する音響音声学的研究	加賀谷　良平

■日本学術振興会特別研究員 2008(平成20)年度

氏　名	資格	研究指導者	採用年度
溝辺　泰雄	PD	永原　陽子	H19～
児島　康宏	PD	ペーリ・パースカララーオ	H18～
溝口　大助	PD	真島　一郎	H18～
久志本　裕子	DC2	大塚　和夫	H20～
稲山　円	DC2	宮崎　恒二	H19～
太田　ワランヤ	DC2	峰岸　真琴	H19～

[2008年度競争的研究経費などによる研究]

研究種目	代表者名	課　題　名	採択期間
基盤研究 (A) 一般	永原　陽子	脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究	H19-H22
基盤研究 (A) 一般	芝野　耕司	AJAXを用いた直接操作・多言語・語学教育e-Learning OSSの開発	H19-H21
基盤研究 (A) 一般	真島　一郎	フィールドワークの理論と手法に関する総合調査：海外学術調査の展開をとおして	H18-H21
基盤研究 (A) 一般	宮崎　恒二	高齢化社会と国際移住に関する文化人類学的研究： 東南アジア・オセアニア地域を中心に	H17-H20
基盤研究 (A) 海外学術調査	飯塚　正人	9.11後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究	H18-H21
基盤研究 (B) 一般	陶安　あんど	中国文書行政形成過程の研究	H20-H24
基盤研究 (B) 一般	高島　淳	クメール、チャム碑文資料に基づくシヴァ教の研究	H19-H21
基盤研究 (B) 一般	中見　立夫	ロシア帝国と「東北アジア」の成立－国際関係史の視点から－	H19-H21
基盤研究 (B) 一般	渡辺　己	形態的言語類型論の再構築－語構造の異なる言語の比較対照をとおして－	H19-H21
基盤研究 (B) 海外学術調査	栗原　浩英	中国・ASEAN地域協力構想におけるベトナムの定位に関する研究	H20-H23
基盤研究 (B) 海外学術調査	深澤　秀夫	会話と手話の相互行為分析に基づく マダガスカル言語文化の共通構造と差異の比較研究	H19-H21
基盤研究 (B) 海外学術調査	菅原　純	近現代テュルク諸語文献を中心とする内陸アジア歴史資料リソースの構築	H18-H20
基盤研究 (B) 海外学術調査	近藤　信彰	近世・近代ペルシア語文化圏における言語・民族・国家形成	H18-H21
基盤研究 (B) 海外学術調査	中山　俊秀	北米先住民諸語自然談話テキスト資料の体系的収集	H18-H20
基盤研究 (B) 海外学術調査	新谷　忠彦	言語・文化調査に基づくパラウン史の解明	H17-H20
基盤研究 (C) 一般	床呂　郁哉	スールー海域世界を中心とする特殊海産物の移動と越境に関する歴史人類学的研究	H20-H24
基盤研究 (C) 一般	豊島　正之	イエズス会辞書類データベースに基づく、対訳を経由する語彙画定過程の研究	H20-H22
基盤研究 (C) 一般	河合　香吏	東アフリカ牧畜民における集団間の友好と敵対のバランスシート：諸集団共存の重層性	H20-H22
基盤研究 (C) 一般	長崎　郁	コリマ・ユカギール語の記述言語学的研究	H19-H22
基盤研究 (C) 一般	渡部　良子	ペルシア語書簡術・文章術とイラン・イスラーム文化	H19-H22
基盤研究 (C) 一般	荒川　慎太郎	西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究	H19-H21
基盤研究 (C) 一般	西井　涼子	タイにおけるムスリム・コミュニティの「改宗」をめぐる人類学的比較研究	H19-H21
基盤研究 (C) 一般	尾立　要子	周辺からの共和主義：フランス海外領政策にみる共和主義の変容	H18-H20
基盤研究 (C) 一般	新江　利彦	ベトナムの日本ODA案件実施地域における少数民族の土着知識継承に関する研究	H18-H20

関連資料

[2008年度競争的研究経費などによる研究]

研究種目	代表者名	課　題　名	採択期間
基盤研究(C)一般	稗田　乃	ナイル諸語の通時的研究―ナイル諸語比較語彙集の作成―	H17-H20
若手研究(B)	塩原　朝子	インドネシア諸語の情報構造の文形式による標示に関する研究	H20-H23
若手研究(B)	椎野　若菜	東アフリカにおけるセクシュアリティの変化と「シングル」の生活戦術の可能性	H20-H23
若手研究(B)	錦田　愛子	中東諸国におけるパレスチナ難民の帰化に関する研究	H20-H22
若手研究(B)	塩谷　もも	ジャワにおける地縁に基づく社会関係の人類学的研究	H20-H22
若手研究(B)	永山　ゆかり	アリュートル語音声資料によるテキスト資料データベース構築とそれに基づく記述研究	H19-H22
若手研究(B)	吉村　貴之	現代アルメニア・ナショナリティの形成過程	H19-H22
若手研究(B)	若狭　基道	ウォライタ語(エチオピア)及びその周辺言語の記述的研究	H19-H22
若手研究(B)	角谷　征昭	ニハ語(タンザニア南西部)の記述と隣接言語との相関	H18-H20
若手研究(B)	丹菊　逸治	ニヴフ民族の口承文学資料の再検討と生活史における位置づけの研究	H18-H20
萌芽研究	小田　淳一	計量修辞学による文彩の情報学的分析	H18-H20
特別研究促進費(基盤C相当)	黛　秋津	18･19世紀ドナウ二公国をめぐる国際関係の変容課程に関する研究	H19-H22
特別研究員奨励費	稲山　円	イランにおけるジェンダーとイスラームの関係性をめぐる文化人類学的研究	H19-H20
特別研究員奨励費	太田ワランヤ	クーイ語の文法の記述	H19-H20
特別研究員奨励費	溝辺　泰雄	アフリカ独自の近代化･自立的発展論に関する歴史的研究： 植民地初期のガーナの事例から	H18-H20
特別研究員奨励費	児島　康宏	グルジア語における文の構造と意味論・語用論	H18-H20
特別研究員奨励費	溝口　大助	マリ南部セヌフォ社会における社会･経済的変化と宗教的実践に関する人類学的研究	H18-H20

[2008年度受託研究･受託事業プロジェクト]

機　関	所員名	課　題　名
(独)日本学術振興会	宮崎　恒二	インドネシアにおけるイスラーム諸集団の出現と動態
総務省	町田　和彦	次世代インターフェースとしての多言語コンシェルジュの研究開発
文部科学省	床呂　郁哉	東南アジアのイスラーム：トランスナショナルな連関と地域固有性の動態
国立大学法人 香川大学	渡辺　己	経済学部言語学研究助成金

[2007年度出版物一覧]

□アジア・アフリカ言語文化叢書

著者名	出版物名
椎野若菜	『結婚と死をめぐる女の民族誌ーケニア・ルオ社会の寡婦が男を選ぶときー』

□アジア・アフリカ基礎語彙集

著者名	出版物名
KAJI, Shigeki	"A Rutooro Vocabulary"
丹菊逸治(編)	『ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集（ノグリキ周辺地域）』

□共同研究成果出版物

著者・編者・訳者等	出版物の題名	共同研究の名称	共同研究の代表者名	実施年度
中山俊秀・山越康裕(編)	『文法を描く2ーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチー』	言語の構造的多様性と言語理論—「語」の内部構造と統語機能の研究	中山 俊秀	2005-2009
KUREBITO, Tokusu (ed.)	"Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses"	形態・統語分析におけるambiguity(曖昧性)—通言語的アプローチ—	呉人 徳司	2005-2006
丹菊逸治 ガリーナ・パクリナ(共編)	『V・サンギ採録ニヴフ語サハリン方言音声資料集(1) フトククさんの昔話と体験談』	形態・統語分析におけるambiguity(曖昧性)—通言語的アプローチ—	呉人 徳司	2005-2006
中谷英明ほか(編)	『総合人間学叢書』第3巻	総合人間学の構築	中谷 英明	2007-2009
中谷英明ほか(編)	『総合人間学叢書』第4巻	総合人間学の構築	中谷 英明	2007-2009
YAMADA, Atsushi	"Parauk Wa Folktales"	タイ文化圏における山地民の歴史的研究	クリスチャン・ダニエルス	2006-2010
新谷忠彦	『タイ族が語る歴史「センウィー王統紀」「ウンボン・スィーボ王統紀」』	タイ文化圏における山地民の歴史的研究	クリスチャン・ダニエルス	2006-2010
チャレ(著)・片岡樹(編訳)	『ラフ族の昔話ービルマ山地少数民族の神話・伝説ー』	タイ文化圏における山地民の歴史的研究	クリスチャン・ダニエルス	2006-2010
KUREBITO, Tokusu (ed.)	"Past and Present Dynamics: the Great Mongolian State"			
MIO, Yuko (ed.)	"Cultural Encounters between People of Chinese Origin and Local People: Case Studies from the Philippines and Vietnam - Proceedings of International Workshop - "	中国系移民の土着化／クレオール化／華人化の人類学的研究	三尾 裕子	2003-2007
TAHERI, Zahra	"The Presence and Absence of Women in Sufi Texts: Women in Persian Mystical Literature from the beginning of the Islamic Era to1900"	イスラーム写本・文書資料の総合的研究	羽田 亨一	2003-2006
アブリズ・オルホン 菅原純 (編)	『新疆およびフェルガナのマザール文書(影印)第2集』	イスラーム写本・文書資料の総合的研究	羽田 亨一	2003-2006
アシルベク・ムミノフ ナーディルベク・アブドゥルアハトフ 河原弥生(編)	『新疆およびフェルガナのマザール文書(影印)第3集』	イスラーム写本・文書資料の総合的研究	羽田 亨一	2003-2006
OHTSUKA, Kazuo and EICKELMAN, Dale F.(eds.)	"Crossing Boundaries: Gender, the Public and the Private in Contemporary Muslim Societies"	ムスリムの生活世界とその変容—フィールドの視点から(中東イスラーム研究教育プロジェクト)	大塚 和夫	2005-2009
Abdallah Said	"The Jisr Family in Tripoli 1757-1980: From Religious Guidance to Political Work"	東地中海域における人間移動と「人間の安全保障」(中東イスラーム研究教育プロジェクト)	黒木 英充	2004-2008
近藤信彰(監訳) 小沢一郎・登利谷正人(訳)	『鮮麗なるアフガニスタン1841-42 ーイギリス軍中尉ジェームズ・ラットレーの石版画より』	中東イスラーム研究教育プロジェクト	黒木 英充	2005-2009

予算 (2008年5月現在)

[2008年度予算額（運営費交付金・間接経費）]※常勤人件費除く

(単位:千円)

運営費交付金	下記以外		155,466
	特別教育研究経費	アジア・アフリカの言語文化に関する共同研究	33,590
		中東イスラーム研究教育プロジェクト	58,200
		急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築（言語ダイナミクス科学研究プロジェクト）	76,900
計			324,156

[2008年度予算内訳]

(単位:千円)

事　項	配分額	
教員個人研究費	5,700	教員個人研究費
客員研究費	2,130	外国人研究員研究費
研究ユニット経費	57,660	研究ユニット研究費
IRC経費	29,800	ＩＲＣ、共同利用設備
FSC経費	36,810	ＦＳＣ
言語研修経費	11,554	言語研修
成果等刊行経費	23,200	ジャーナル、叢書、基礎語彙集、共同研究プロジェクト出版物、編集委託費
広報等経費	10,490	広報誌、要覧、リーフレット、web他
プロジェクト経費	28,090	共同研究プロジェクト研究会、短期共同研究員
文献資料経費	17,000	図書関係資料、文献資料
国際的水準経費経費	3,630	国際研究集会、国際研究集会招聘帰国・派遣等
研究未開発言語文化派遣経費	7,200	研究未開発言語文化派遣
展示等経費	1,700	企画展
共通経費	7,064	共通経費(消耗品、各種修理代、出版物発送代　等)
外部委員経費	2,700	運営諮問・共同利用・研修専門・海外学術総括班専門・編集の各委員会
会議等経費	500	会議等出席旅費等
所長裁量経費	2,900	
非常勤研究員人件費	31,100	
外国人研究員人件費	38,460	
予備費	6,468	
合　計	324,156	

※上記には、特別教育研究経費（アジア・アフリカの言語文化に関する共同研究、中東イスラーム研究教育プロジェクト、急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築）を含む

[2008年度外部資金受入額]

科学研究費補助金(直接経費)	
基盤A(海外、一般含む)	41,900千円／ 5件
基盤B(海外、一般含む)	32,800千円／10件
基盤C	9,900千円／10件
萌芽研究	1,100千円／ 1件
若手研究	8,300千円／ 9件
特別研究促進費	600千円／ 1件
特別研究員奨励費	5,100千円／5件

※研究成果公開促進費除く

受託研究費・受託事業費　他
26,460千円／ 4件

計	126,160千円／45件

[歳出決算額(運営費交付金)]

(単位：千円)

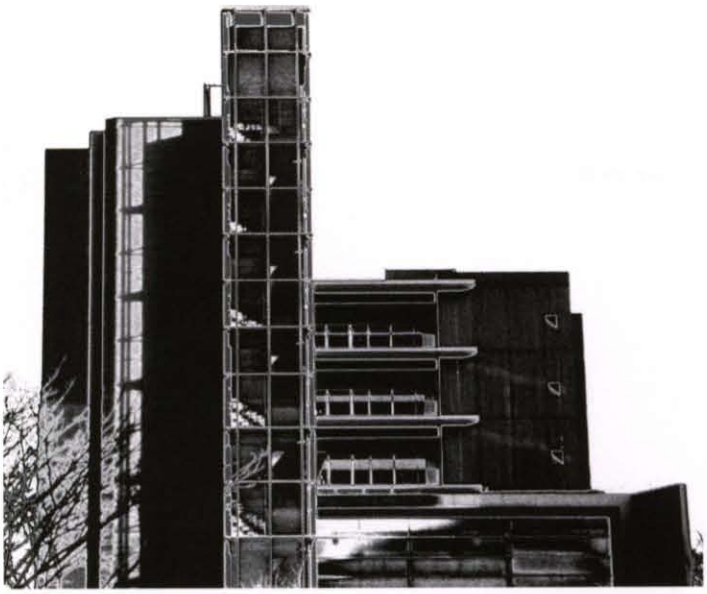
区　　分	2005年度	2006年度	2007年度
人件費	525, 000	467, 045	460, 104
物件費	238, 000	197, 421	226, 916
補助金間接経費(AA研配分額)	19, 980	9, 660	26, 860
計	782, 980	674, 126	713, 880

沿革

年 度	事　　項
1961(S36)	日本学術会議がアジア・アフリカ諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告。
1964(S39)	アジア・アフリカ言語文化研究所が東京外国語大学に附置。わが国最初の人文科学・社会科学系共同利用研究所。
1967(S42)	研究未開発地域への助手等の現地投入を開始。
1974(S49)	言語研修を本格的に開始。
1978(S53)	メインフレーム・コンピュータを導入。
1983(S58)	海外学術調査(当時、国際学術研究)総括班の事務局が置かれる。
1991(H3)	研究体制の抜本的見直しを行ない、従来の小部門制(及び1客員部門)から4大部門制(及び1客員部門)をとる。
1992(H4)	東京外国語大学大学院地域文化研究科に設置された博士後期課程の教育に所員が参加。
1995(H7)	文部省から「卓越した研究拠点(COE)」に指定される。
1996(H8)	COEとして初の国際シンポジウム「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」を開催。
1997(H9)	附属情報資源利用研究センターを設置。
2001(H13)	中核的研究拠点形成プログラム(2002年度に文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行)「アジア書字コーパス拠点」が発足。(～2005年)
2002(H14)	旧西ヶ原キャンパスから現在の府中キャンパスに移転。 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築一象徴系と生態系の関連をとおして」が発足。(～2006年)
2004(H16)	東京外国語大学、国立大学法人になる。
2005(H17)	複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置。 フィールドサイエンス研究企画センターを設置。 中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設。 中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始。
2006(H18)	文部科学省の「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」枠により「東南アジアのイスラーム～トランスナショナルな連関と地域固有性の動態(略称ISEA)」を開始。
2007(H19)	コタキナバル・リエゾンオフィスをマレーシア・サバ州に設置。
2008(H20)	「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」プロジェクトを開始。

■歴代所長

岡　正雄	1964年―1972年
徳永　康元	1972年―1974年
北村　甫	1974年―1983年
梅田　博之	1983年―1989年
山口　昌男	1989年―1991年
上岡　弘二	1991年―1995年
池端　雪浦	1995年―1997年
石井　溥	1997年―2001年
宮崎　恒二	2001年―2005年
内堀　基光	2005年―2006年
大塚　和夫	2006年―



2004年度より、「東京外国語大学」は、「国立大学法人」として新しく生まれ変わりました。これにともない、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、「アジア・アフリカ言語文化研究所」の名称ならびに本研究所の略称である「AA研」と左記のロゴマークの商標登録査定を特許庁に申請し、平成17年8月19日付で商標登録証が発行され、商標として登録されました。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

TEL 042-330-5600 FAX 042-330-5610
MAIL ilcaa@aa.tufs.ac.jp
URL http://www.aa.tufs.ac.jp

Research Institute for Languages and
Cultures of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies,
3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo,183-8534, Japan
phone +81-(0)42-330-5600, fax +81-(0)42-330-5610

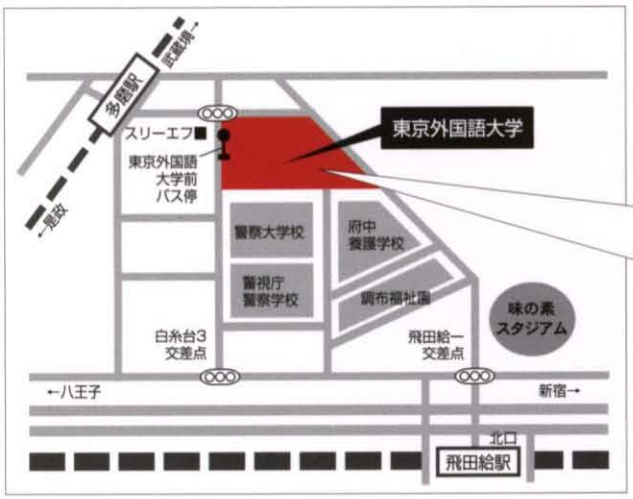
AA研へのアクセス

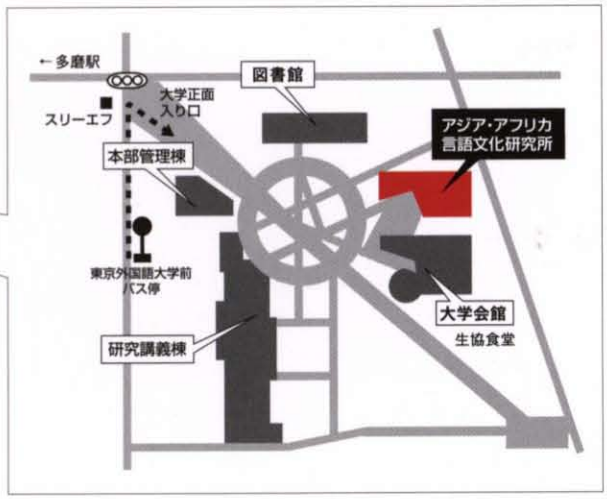
■ＪＲ中央線「東京」駅～「武蔵境」駅、約40分
　ＪＲ中央線「新宿」駅～「武蔵境」駅、約20分

■ＪＲ中央線「武蔵境」駅より西武多摩川線に乗り換え、「多磨」駅下車、駅より徒歩約５分。

■京王線「飛田給」駅北口または「調布」駅北口より「多磨」駅行きバス乗車、「東京外国語大学前」停留所で下車、停留所より徒歩２分。
「飛田給」駅北口から約13分間隔でバスが運行。所要時間約７分。

「調布」駅北口からは20～30分間隔で運行。所要時間約20分。
バス時刻表は http://www.bus-navi.com/





東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
要 覧 2008

編集：広報担当(基礎データ班)　(澤田英夫・床呂郁哉・渡辺己)
表紙デザイン：小田マサノリ　本文レイアウト：鎌田幹子
発行：2008年8月22日

■表紙の写真について

［カシュガルの子供たち］土レンガでできた古い民家が密集しているウイグル人居住区の老城を歩いていると、のんびりと時間をつぶしている老人達や、元気に遊び廻っている子供達と出会う。カメラを向けると散り散りに遊んでいた子供たちが我も我もと集まりポーズをとる。

2007年8月中華人民共和国新疆ウイグル自治区カシュガルにて

撮影者：高坂香

アジア・アフリカ言語文化研究所
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa